



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ツルゲーネフとピーサレフ
Author(s)	相沢, 直樹; Aizawa, Naoki
Citation	スラヴ研究, 37, 43-83
Issue Date	1990
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/5185">https://hdl.handle.net/2115/5185</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113310.pdf



# ツルゲーネフとピーサレフ

相 沢 直 樹

## はじめに

ロシア批評史上、いやさらにロシア文学史全体の中でピーサレフの占める位置は独特であり、またその評価のされ方に至ってはきわめて特異ですらある。「ソヴィエトの研究者たちは伝統的にピーサレフに対して用心深く構え、チェルヌィシェフスキイやドブリューボフに対するほど注意を払っていない<sup>1)</sup>」ことは、ピーサレフについてのロシア・ソヴィエト本国での記述を見れば誰しも感じるであろう。そしてその理由がおそらく、彼の議論に極端に走るきらいがあるため、所謂「革命的民主主義者」の系列に無条件で組み入れることがためらわれるからなのだろうことも想像に難くない。とりわけ彼が国民詩人プーシキンに対して否定的だったことは、彼が健筆をふるった1860年代を越えて後世に大きな影響と波紋を投げ掛け、爾来悪名高く記憶され、研究者たちには「批評家ピーサレフの方法論の脆弱な側面<sup>2)</sup>」とされてきた。一方、西欧ではピーサレフは「ニヒリスト」の典型として、バザーロフ、ラスコーリニコフ、スタヴローギンといった虚構の世界の人物たちと同列に並べられ、いささかセンセーショナルなイメージで受け止められることが多かったように見える<sup>3)</sup>。いずれの場合も、これらはいわば《ピーサレフ神話》という伝統を形成しているといえよう。

ところで、ピーサレフはそもそもの初めからプーシキンを否定していた訳ではない。それどころか、ツルゲーネフの小説『父と子』(1862年)の発表後いちやくそれに反応して書き上げた論文『バザーロフ』では、小説の主人公「ニヒリスト」バザーロフが詩はナンセンス、プーシキンを読むのは時間の無駄遣い、音楽をやることは滑稽、自然を楽しむのは馬鹿げていると決めつけるのに対して「バザーロフはでたらめを言っている。残念ながら、これは本当だ。彼は自分が知りもしないことや理解していないことを、よく考えもせず否定している。(中略)他人を自分と同じ尺度で切ろうとすることは狭隘な知的専制に陥っていることを意味する<sup>4)</sup>」とまで批判しているのだ。しかし、ピーサレフの議論はチェルヌィシェフスキイの小説『何をなすべきか』(1863年)の登場によって急転回を見せる。「知力の節約」という原理に基づく功利主義の立場に他ならない、自ら言うところの「リアリズム」で理論武装したピーサレフは、論文『リアリストたち』(1864年、発表時の題名は『未解決の問題』)において社会にもたらす効用(польза)をあらゆる物事の試金石として体系的な議論を展開し、芸術に関しては非言語芸術よりは言語芸術を、韻文よりは散文を高く評価し、叙情詩にはほとんど価値を認めないようになっていく。この傾向は《同時代人》誌の批評家アントノーヴィチとの一連の論争の中で次第にエスカレー

トして行き、論文『プーシキンとベリンスキイ』（1865年）で『エヴゲーニイ・オネーギン』およびプーシキンの叙情詩をあげつらい、ついに悪名高い『美学の破壊』（1865年）に行き着く。ピーサレフの議論に見られるこの明らかな変化は、彼のバザーロフ観の変化と密接な関係にあり、さらに言えば、その背後には19世紀のロシア文学における大きな課題の一つであった《ポジティヴ・ヒーロー》の問題が底を流れているのである<sup>5)</sup>。

一方、「ニヒリズム」という言葉を入口に膾炙させた長編小説『父と子』（1862年）を発表し、「ニヒリスト」バザーロフを世に送った作家ツルゲーネフ自身は、作品発表直後からの大反響・大論争に驚き、自分に向けられた批判・非難に対しては書簡や本の序文等で折りに触れ弁明に努めるとともに、その後の二つの長編小説、『煙』（1867年）と『処女地』（1887年）の中で自らの『父と子』が提起した問題の解決を作品を通して試みざるを得なくなる。ピーサレフにとって『父と子』が転機だったように、ツルゲーネフもこの作品以後大きな波に巻き込まれて行くのだ。それはこの作品そのものが様々な可能性を秘めた奥行き深いものであることにもよろうが、また、肯定的な形にせよ否定的な形にせよ、小説の主人公バザーロフに靈感を得た批評家ピーサレフの筆の力、彼のプロバガンダに負うところが大きとしなければならない。その意味では『父と子』以後、この二人は言わば一種の「運命共同体」のごときものを形作っているのであり、ピーサレフにとってツルゲーネフが最も重要な作家であったように、作家ツルゲーネフにとっての批評家ピーサレフの存在の意義も、いささかも看過することはできない。ピーサレフは発表当時急進派からも保守派からも批判を浴びた『父と子』を無条件に認めた唯一の批評家であり、実際、ツルゲーネフはピーサレフのバザーロフについての批評、洞察を高く評価し、その批評活動に一目置いて関心をもって見守っていた。両者の関係は、作家と批評家という面のみならず、言わば「ニヒリズム」の「生みの親」とその体現者という部分もあり、本稿で後に見るように、作家と作品のモデルという面も有しているのである。

ところで、ツルゲーネフとピーサレフの関係・交渉を扱った研究はこれまでもいくつかあるが、そのほとんどはピーサレフによるツルゲーネフ批評をあとづけ、ピーサレフの思想的展開におけるツルゲーネフの作品の果たした役割やツルゲーネフ批評史へのピーサレフの寄与（とりわけ『父と子』の評価）等を考察したものである。例えばベリチコフ<sup>6)</sup>はピーサレフの諸論文におけるバザーロフ観を考察しながらツルゲーネフとの関わりにも触れ、チェトゥノーヴァ<sup>7)</sup>はピーサレフのツルゲーネフ論をドブロリューボフのそれと比較している（もっとも、ドブロリューボフは『父と子』登場の時点では故人になっていたもので、この作品についてはピーサレフの批評のみを追うことになる）。また比較的新しい所では、コンキンの論文『ツルゲーネフとピーサレフ<sup>8)</sup>』（1976年）があるが、これはやはりピーサレフの側から、そのツルゲーネフ批評を作家の作品別に考察したものである。これらとは逆の方向から、すなわち「ツルゲーネフはピーサレフとどのように関わったか」という問題提起をしたのが、エフィーモヴァの論文『ツルゲーネフとピーサレフ<sup>9)</sup>』（1968年）であった。彼女は、ふつう作家とベリンスキイ、作家とゲルツェン、作家と《同時代人》誌の批評家たち、作家と70年代の革命家たちとの関係というように区分けされている「ツルゲーネフと革命的民主主義者」というテーマに「ツルゲーネフとピーサレフ」を加

えて補完するべきであるという見識を披露している<sup>10)</sup>。しかしながら、エフィーモヴァも含めた以上の論考では批評家の生前に議論が限定されているため、彼の死後と作家の関わりについて論じられることはなかった。そこで本稿では、批評家の死後作家ツルゲーネフの内部で発酵して行く「ピーサレフ」のイメージについても考察の対象とし、ツルゲーネフの側から見たピーサレフ像をより包括的に浮き彫りにしてみたい<sup>11)</sup>。すなわち本稿で我々はツルゲーネフの「作家」としての面を中心に据え、「批評するピーサレフ」と「批評されるツルゲーネフ」という方向ではなく、「描かれるピーサレフ」と「描くツルゲーネフ」という観点から両者の関係にアプローチして通史を試みるとともに、あわせてピーサレフ受容史研究の一環としたい。

## 1. ツルゲーネフの書簡に見られるピーサレフへの関心

ピーサレフに対するツルゲーネフの態度は、小説『父と子』の発表を境としてまるで異なっている。この作品についての批評を知るまでは、作家はこの批評家を評価するしない以前の問題として、彼にはほとんど関心を示していない、いや、まるで眼中になかったと言ってもいいかもしれない。これは一つには両者の年齢が32年近く離れているという事情も手伝っている。ピーサレフが生まれた1840年に後の作家はベルリン大学留学中でグラノフスキイ、スタンケーヴィチ、バクニンらと交わっており、ツルゲーネフが『獵人日記』の成功によって作家としての地歩を固めつつあった年（1852年）の秋に将来の批評家はようやくギムナジウムへの入学を果たしているのである。ピーサレフは1858年の秋から《夜明け》という若い女性向けの啓蒙雑誌の書評部門を担当することになり、翌年にはその年の1月に発表されたツルゲーネフの『貴族の巢』を論じた文章をものしているが、これは雑誌の性格もあろうが、後のピーサレフからは考えられないほどおとなしい論調に終始し、社会的な観点と言え、女主人公リーザを論じながら女子の受けている教育の歪みを強調し、女性の覚醒を訴えている部分くらいである（しかも、全体の半分近くを占めるこの部分こそ、この論文の眼目なのである）。ツルゲーネフがピーサレフのこの論文について述べたものは残っていないし、駆け出しの批評家をどう評価していたのかを直接知る術はない。しかし我々は、偶然のはからいで示唆的な資料に触れることができる。1860年3月20日付けのマルコ・ヴォフチョークあて書簡の中でツルゲーネフは、彼女から依頼を受けたピーサレヴァ夫人（ヴォフチョークの母とは従姉妹の間柄に当たる）の件について何某に言付けたところ、「長いこと彼はピーサレヴァ夫人を捜し当てることができませんでした。彼が夫人の住所を突き止めた時には、夫人はすでにモスクワに行ってしまった後だったので——夫人の御子息は本当に気が狂ってしまったのです<sup>12)</sup>」（下線部引用者）と伝えている。ここで話題になっているのは確かにドミートリイ・イヴァノヴィチ・ピーサレフに他ならないが、ツルゲーネフにとってはあくまで親しくしている女流作家マルコ・ヴォフチョークの又従弟でしかない（あるいは彼女の知り合いの女性の息子という程度なのかもしれない）のは明らかである<sup>13)</sup>。

幸いにピーサレフは年内に健康を回復し、12月からは Г. Е. ブラゴスヴェートロフの主

宰する雑誌《ロシアの言葉》に寄稿を始める。この雑誌に移ってからピーサレフは持ち前のポレミカルで鋭く攻撃的な議論の才能を遺憾なく発揮する。とりわけデビュー後間もなく発表された『19世紀のスコラ学』（《ロシアの言葉》1861年第5号）は、インテリゲンチヤの「ナロード」神話を打ち破ろうとした刺激的で画期的な論文であった。折しも11月にはドブロリューポフが亡くなり、《同時代人》誌のチェルヌイシェフスキイはその後任としてピーサレフに白羽の矢を立てたが、ピーサレフはブラゴスヴェートロフとともにチェルヌイシェフスキイを訪ね、招聘を辞退した。批評壇はいよいよピーサレフの時代を迎えようとしていたのである。そんなピーサレフはいやでもツルゲーネフの注目を呼ぶようになって行く。もっとも、始めはきわめてネガティブな反応だった。ピーサレフは年末に『ピーセムスキイ、ツルゲーネフとゴンチャロフ』（《ロシアの言葉》第11号）という論文を発表していた。その中で批評家は、1）この三人の作家を「現代文学の最も重要な代表者」として位置づけ、マイコフとネクラーツフ以外は叙情詩人を認めず、2）ゴンチャロフに対しては、「瑣末なディテールの入念な複製」と「顕微鏡的に鋭い分析」だけで深い思想も偽りなき感情もないと批判し、3）ピーセムスキイとツルゲーネフについては専ら彼らの「生活の現象に対する否定的で全く醒めきった眼差し」を尊重していると告白し、4）ピーセムスキイはツルゲーネフよりも深くこの現象をとらえ、より生き生きとそれを描き出しているとして、前者を後者よりも高く評価している。その翌年、詩人 Я. П. ポロンスキイから送られたピーサレフのこの論文の一部を読んだツルゲーネフは、珍しくいささか激烈な調子でポロンスキイにあてて次のように返事している（1862年1月24日付け<sup>14)</sup>書簡）。

君が送ってくれたピーサレフ氏の論文の断片を見ると、若者たちは唾を吐いている。——だが今に見ておれ、いつまでもそんなふうには唾を吐いている訳にはいかないから！それこそ物事の道理というものだ——それも特に、我々がみな心の奥では暴君であるロシアでは、誰かの横面を張り倒していないと生きた心地がしないのも驚くにはあたらぬ。我々としては、この唾する若者たちに「どうぞお好きなように！」と言おう。そして彼らに、君たちが今唾している作家たちも昔はまずい作家だったが、そんな作家でも、自分たちの中から出せるものなら出してみたまえと勧めるだけのことだ。それができれば彼らが正しいことになるし、——我々の方ではくれぐれも彼らの幸運を祈ろう。（T(n), IV, 332. 下線部引用者）

ツルゲーネフが触れているのはピーサレフの論文の冒頭部分であろうという書簡の注釈者の推理<sup>15)</sup>は、支持しうる。批評家はそこで奇しくも三人の作家を「父」の世代としてひとまとめにし、彼らの全盛期は過ぎ「次第に過去の時代の活動家になりつつある」のに対し、「子」の世代が「人生の諸問題をもう自分で解決できる」ようになっているとしているが<sup>16)</sup>、こうした発言は作家には傲慢に聞こえたと考えられるし、友人のポロンスキイやフェートラを「顕微鏡的詩人」と呼び、彼らの詩は「じきに忘れ去られるであろう」と言っただけのけた（П, I, 193）こともツルゲーネフをして「若者たちは唾を吐いている」

と嘆かしめる一因となったであろうと想像できる。また重要なことは、ここでピーサレフは「若者たち」の一人として見られているのであって、一個の独立した批評家として見られているのではないということだ<sup>17)</sup>。

しかし、3月に『父と子』が発表され、この作品をめぐる大論争が展開される中で、ツルゲーネフはピーサレフの批評を高く評価し、次第にこの批評家に対する関心を高めて行く。アプラクシン宮殿を炎上させたペテルブルグの大火など首都の混乱を目の当たりにしてスパスコエに戻ったツルゲーネフは、П. В. アンネンコフにあてた書簡（同年6月8日付け）の中でその時の模様を「この狂気、この悪行、このカオスは、手紙ではとても表せません！」と伝えた後、自作『父と子』が引き起こした論争に驚き、次のように書いている。

それとともに私のまわりに『父と子』に関する古い問題、陰口等がどっと押し寄せて来ました。これもまた一種のカオスです。ある人たちのお世辞には穴があったら入りたいくらいですし、また別の悪罵は私には心地よいものでした。《ロシアの言葉》のピーサレフの論文はとてもすばらしいものに思えました。この小説が我が国の生活の現時点にあらわれることになったのは、火に油を注ぐようなものだったのです。まるで狙ったように、俗に言う、折よくかちあったのです。(T(n), V, 12. 下線部引用者)。

翌1863年、ピーサレフの『我が大学の学問』（“Наша университетская наука”，《ロシアの言葉》第7号・第8号）が出ると、ツルゲーネフはどこかでその噂を聞きつけたと見えて、わざわざ滞在先のバーデン・バーデンからアンネンコフにあてて「Д. ピーサレフの『大学生活について』（“Об университетской жизни” ツルゲーネフは題名を正確につかんでいない——引用者注）という手記に現れたものはすべて当地の私のもとに至急お送り下さいますよう切にお願い申し上げます。それは《ロシアの言葉》誌に掲載されています。もし必要なら、私のつけで一部予約し、そのページを切り抜いて帯封をした上で当地の私のもとにお送りいただきたい。私にはこれが非常に必要なのです。本当に恩に着ますから」(T(n), V, 163) とまで強い言葉で関心を露わにし（10月1日付け書簡）、その三日後には再びアンネンコフに「お願いしたピーサレフの論文はもうお送りいただいたものと期待しております」(T(n), V, 165) と要請を繰り返している。

またその翌年、ピーサレフが論文『リアリストたち』（雑誌発表時の題は『未解決の問題』、《ロシアの言葉》1864年、第9号・第10号・第11号）を書いて、『父と子』は急進派青年層の戯画であるとして作家を非難していた《同時代人》のアントノーヴィチの解釈を批判すると、今度もアンネンコフに「お願いですから私の名前で《ロシアの言葉》を予約して下さい。噂によると、その雑誌でピーサレフが私のために《同時代人》と闘っているということです。そして、この興味深いテーマについての彼の論文は、何でもいいですからバーデンの私のもとに送って下さい。代金は帰国次第お返しします」(T(n), V, 341. 下線部引用者) と強く依頼している（1865年1月31日付け書簡）<sup>18)</sup>。もっとも、その後の作家の手紙には『未解決の問題』について「ピーサレフの無駄口（разглагольствование）はそ

の場で走り読みできるでしょう」(同年3月6日付けアンネンコフあて書簡。T(n), V, 341)といささか批評家を軽んじた言い方も見られ、ツルゲーネフのピーサレフに対する関心は、敬服の念というよりはむしろ好奇心に基づいたものであることも窺わせている<sup>19)</sup>。いずれにせよ、《夜明け》時代は全くツルゲーネフの眠中になかった批評家ピーサレフが、《ロシアの言葉》の論客として活躍するようになってからは次第に作家の関心を呼ぶようになり、それを決定的なものにしたのが『バザーロフ』を皮切りにした一連の『父と子』批評であったことは疑いない。

## 2. 出 会 い

かつてツルゲーネフはゴゴリ追悼文を発表したかどで一ヶ月の禁固の後、スパスコエへ追放という処分を受けたことがあったが(1852年)、60年代のピーサレフたちを取り巻く状況は一層厳しく困難なものであった。1862年、ツルゲーネフが『父と子』を執筆して「ニヒリスト」を世に送り出し、ピーサレフが論文『バザーロフ』の中でこの作品の主人公を「我が国の若い世代の代表者」とであると称揚すると、それらに時を合わせるかのように、5月半ばにはペテルブルグで大火が始まり、檄文『若きロシア』が現れ、市内は不穏な空気に包まれていた。6月には《ロシアの言葉》誌と《同時代人》誌が8ヶ月の停刑処分を受けた。そうした中で、7月にピーサレフはゲルツェンを誹謗したパンフレットを書いた秘密警察の密偵シェド・フェロッチを糾弾し、ロマノフ体制の打倒を叫ぶ檄文を執筆したかどで逮捕され、ペトロ・パブロフスク要塞監獄に幽閉された。辛うじて翌年の6月に要塞監獄内で「文筆活動を続ける」ことが許可され、かくして『我が大学の学問』(《ロシアの言葉》1863年、第7号・第8号)以下一連の論文が独房から書き送られることになったのである。獄中に幽閉されるようになってからピーサレフの筆はますます冴え渡り、その議論は鋭さを増して行く。実際、彼の代表的な論文は、ほとんどすべてこの獄中時代に書かれている。1864年には『リアリストたち』(『未解決の問題』)を発表して独自の「リアリズム」理論を打ち立てて新境地を切り開き、「美学」<sup>20)</sup>に対する対決姿勢をあらわにし、以後「美学者」たちの権威の拠り所に利用されていたプーシキンを攻撃し、返す刀で詩人を称えたベリンスキイまで切って落とし、その間、保守派とのみならず《同時代人》のアントノヴィチらとも一連の論争を繰り広げ、ついに『美学の破壊』(1865年)に行き着くというように、わずか二年あまりの間にピーサレフの論調は加速度的にエスカレートしていった。

1866年はピーサレフには論文発表の自由がなかった。4月には要塞内での文筆活動はおろか面会すら禁じられた。カラコーゾフによる皇帝暗殺未遂事件が起きてから、5月末には《ロシアの言葉》誌は《同時代人》誌とともに廃刊処分を受けた。ツァーリ政府の弾圧が厳しくなったのである。しかし、同年11月18日、ピーサレフは四年半ぶりによく要塞監獄から釈放されることになった。一方、この年一杯バーデン・バーデンで『煙』の執筆に取り組んでいたツルゲーネフは、翌1867年1月これを脱稿し、2月に帰国した。スヴォーロフの証言によると、同月ツルゲーネフはピーサレフに会いたい旨を表明したいと

いう<sup>21)</sup>。そして明るく3月初旬に、ペテルブルクのボトキン宅にいたツルゲーネフをピーサレフは二度訪れている<sup>22)</sup>。ツルゲーネフは初めて会ったピーサレフの貴族的な容貌と上品で洗練された物腰とにいたく驚いたようだ。M. B. アヴデーエフあての書簡（同年3月30日付け）にはその驚きがそのまま現れている。

ピーサレフ、元《ロシアの言葉》の批評家だった偉大なピーサレフが、私のところに立ち寄ってくれましたが、きわめて頭の切れる人間で、まだまだ伸びそうな人物だと判りました。けれども大事なことは、世に言う *il a l'air d'un enfant de bonne maison* [彼は良家のお坊ちゃんのような雰囲気をしている] ということ、きれいな手をしていて、爪などこんなに長いのです（その絵を描いて見せている——引用者注）。これはニヒリストにしては、いささか不思議なことです。（Т(п), VI, 213）

エフィーモヴァも指摘しているように「偉大なピーサレフ」（великий Писарев）などという言い方には皮肉も聞かれないではないが<sup>23)</sup>、全体として、作家が「ニヒリスト」ピーサレフの容貌のどこか貴族的なところにひどく驚いているのがよくわかる。

同様のことを彼は後年、オストロフスカヤ夫人にも述べている。作家はピーサレフをドブロリュポフと比べて、後者の方が「大物」（более крупная личность）に、前者の方が「繊細」（более тонкая）に見えたと語っている<sup>24)</sup>。

彼からは混じり気なしの貴族の家柄の出の青年という印象を受けました。柔和でお坊ちゃん育ちで（нежный и холерный），——きれいな手をしていて、指は細く長く、物腰はデリケートでした<sup>25)</sup>。

さらに、作家はこの時のボトキンとピーサレフの間のおもしろいエピソードを紹介している。ボトキンはピーサレフが自分の家にやってきたことに我慢がなかったが、その場を立ち去ろうとはしなかった。そして彼は、ピーサレフが何か言おうとすると、「君たちはまだひよっ子で、青二才、無学者だ！」その分際でよくのこのこやって来れた、と口をきわめて罵り始めた。するとピーサレフは「慇懃に感情を抑えて」、現代の若者たちを十把一からげに「無学者」と呼べるほどボトキン氏は彼らのことをご存じなのでしょう、  
「若さ」に関して言えば、これは罪ではありません、時が来れば若者たちも成熟いたしましょう、と答えたという。「こうして、あらゆる美しいもの、優雅なもの、洗練されたものの崇拜者が全く粗野で短気な人間で、『ニヒリスト』『皮肉屋』などに見なされていた人物が真のジェントルマンだと判ったのです」<sup>26)</sup>と、ツルゲーネフはユーモアたっぷりに結んでいる。

一方、ピーサレフの死の翌年（1869年）に発表された『ベリンスキイの思い出』の中では、ツルゲーネフはピーサレフを批判したことを伝えている。

1867年の春、私がペテルブルク経由で旅行中に、彼は私に敬意を表明してくれた。

つまり、私を訪ねてくれたのだ。私はその時分まで彼に会ったことはなかったが、彼の論文は関心を抱いて読んでいた。もっとも、その中の主張の多く、概ねその傾向には賛同しかねていたが。とりわけ私が憤慨していたのは、彼のプーシキンについての論文であった。話をしている間、私は彼の前で率直に自分の考えを述べた。ピーサレフは一目見た時から、真実を話すことができるのみならず、またそうしなければならないような、誠実で頭の良い人物という印象を与えたからだ。「時に、あなたは」と、私は切り出した、「プーシキンの最も胸を打つ詩句の一つ（生き残ることになるリツェイの最後の仲間への彼の呼び掛け：「不幸な友よ」……）に泥を塗りましたね<sup>27)</sup>。あなたは詩人が友人に、ただ焼け酒でも飲んで酔っ払うように勧めているだけだと主張していらっしゃいます。あなたは美的感覚が鋭すぎるくらいの方です。あなたにはこんなことを本気で言えるはずがありません——あなたはこれをわざと、何か目的があつておっしゃったのです。その目的があなたを正当化してくれるかどうか見てみましょう。私は誇張ならわかります、カリカチュアも大目に見ましょう——ただし、真実の誇張、まともな意味でのカリカチュア、本当の傾向にそったカリカチュアですよ」(T(c), X IV, 35-36. 傍点部原文イタリック, 下線部引用者)

ツルゲーネフは、今の若者たちが詩を書いてばかりいるというなら理解できるし、ピーサレフの「悪意に満ちた非難」や「嘲笑」も認め、「不公平だが、しかし有益だ！」と考えようが、実際には一握りの人々、それも老人が詩作に手を染めているのであって、彼らに対して怒るほどのことがあるのだろうか、と批評家に疑問を呈している。

「これではまるで、誰よりも真っ先に差し迫ったこと、必要なこと、猶予ならぬことを感じとり、それを嗅ぎつける義務を負う批評家たるあなたが大衆の注意を促すべき他の何千もの焦眉の問題など存在しないというみたいじゃないですか？1866年の詩人追悼軍だなんて！まったくこれは骨董趣味的な非常識、擬古主義にはほかなりません！ベリンスキイ——あの人なら決してこんなおかしなことにはならなかったでしょう！」。ピーサレフがどう思ったのかは、わからない。しかし、彼は私に何とも答えなかった。たぶん、私に賛同してはいなかったのだろう。(T(c), X IV, 36. 傍点部原文イタリック)

ピーサレフの詩に対する攻撃をアナクロニズムと批判したツルゲーネフは、ベリンスキイには「まさに何が当面の問題となっているのか、至急解決を要するものは何か、どこに『当面の関心事』が現れているか、の理解」があつたと評価している<sup>28)</sup> (T(c), X IV, 34)。また、ベリンスキイは時間に追われて表現を練る間もなく論文を書いたために多弁にならざるを得なかったが、「亡くなったピーサレフのおかげで我が国の雑誌の批評欄において定着した——これは認めねばならない——際限のないおしゃべりには決して至らなかつた」(T(c), X IV, 48. 下線部引用者) と、ピーサレフに対しては手厳しい。

ツルゲーネフは、一方で確かにピーサレフを高く評価していた。そのことはこの回想の

中で、亡くなったばかりのピーサレフを「多くの期待のかかっていた青年」(T(c), XIV, 35)と呼んでいることにも現れている。しかしツルゲーネフにとっては、そのピーサレフもベリンスキイの前では霞んでしまうのであった。これは、一人ピーサレフに関してだけの話ではなかった。若い時に覚えたベリンスキイに対する敬愛の念を終生抱き続けたこの作家は、批評家たちをどうしても彼との比較で見えてしまう<sup>29)</sup>。「その全存在で自国民の核心近くに立っている」「中心的性格」(T(c), XIV, 30)と彼が呼ぶベリンスキイは、彼にとってはどこまでも理想の批評家であった。ピーサレフの才能をいかに高く評価しようとも、最愛の詩人プーシキンと敬愛してやまぬ批評家ベリンスキイをともに攻撃したピーサレフに対して、ツルゲーネフが心中どこか釈然としないものを感じていたであろうことは想像に難くない。それでも同時代の批評家の中では、ピーサレフに対するツルゲーネフの関心には並々ならぬものがあったことは否めない。それを何より物語るのが次に見る『煙』をめぐる二人の往復書簡である。

### 3. 『煙』をめぐる往復書簡

さて、ピーサレフがツルゲーネフを訪問してから一ヶ月あまりたった4月の半ば、小説『煙』が《ロシア報知》(第3号)に発表された。この月の初旬に再び国外に出たツルゲーネフは、バーデン・バーデンで新作の反響をうかがっていたが、彼は今回も自分の作品についてピーサレフが論文を書くものと期待していたようだ。4月24日にはアンネンコフにあてた書簡の中で「ピーサレフは何か言うのでしょうか？お笑いにならないで下さい。私にとってはこれはとても重大なことなのです——前兆として」(T(m), VI, 237)と漏らしている。『父と子』をめぐる大論争の中でピーサレフの批評を高く評価し、彼が自分のためにアントノーヴィチと闘っているものとみなしていたツルゲーネフが、新作『煙』においてもピーサレフの理解が得られるものという期待を抱いたとしても不思議ではない。彼にとっては、まさにピーサレフの批評こそ自作の運命を占う「前兆」に他ならなかったであろうことも十分うなずける。しかし、小説発表から一ヶ月近くたってピーサレフの見解を知ることができないのに痺れを切らしたものと見えて、ツルゲーネフは5月10日にバーデン・バーデンからピーサレフに手紙を書き、彼の『煙』についての見解を直接尋ねた<sup>30)</sup>。こうして『煙』をめぐる作家と批評家が書簡の中で意見を述べあうという前代未聞のユニークな出来事が始まった。

ツルゲーネフは、その最初の手紙の中で礼儀正しくピーサレフともう一度会って話し合いたいという希望を述べた後、単刀直入に尋ねている。

先日、私は『煙』に対してあなたとあなたの御仲間がどのような印象をお持ちになったのか疑問になりました——あなた方は「グバリョーフ」の部屋の諸場面に関して腹を立てられ、その場面のために小説全体の意味が見えなくなってしまったのでしょうか？私の伝え聞くかぎりでは、『煙』は多くの読者の間に私に対する憎しみと軽蔑

の念を引き起こしかねない有様のようです。目を通すことのできた二、三の論文は同じような調子でした (T(n), VI, 255)。

この手紙を受けて、ピーサレフはバーデン・バーデンの作家にあてて5月18日付けでかなり長めの返事を書いた。その中で彼はまず、自分には「仲間」などおらず、伝えられるのはあくまで自分の「個人的見解」にすぎないと断っている (II, IV, 423-424)。次に彼は、自分たちの雑誌には「事前検閲」の手がのびており、また自分は「神経系統の全体が自由な世界に移ったことによって衝撃を受け」、「目下のところ、この衝撃から立ち直ることができないでいる」 (II, IV, 424) ので、おそらく『煙』について論文を書くことはできないだろうから、この手紙の中で自分の見解のあらましを出来る限り伝えたと前置きして本題に入る。ピーサレフはツルゲーネフの推測に反して、グバリョーフの部屋の場面はさほど不快ではなかったと言う。それらは「小説にぞんざいに縫い付けられた挿話となっており、それはおそらく、攻撃の力をすべて右派に向けた作者が決定的にバランスを失ってしまったり、知らぬ間に自分にふさわしからぬ赤い民主主義者たちの仲間に入っていた、などということがないようにするためなのでしょう」 (Там же)。

それでもやはり、私は『煙』にははなはだ不満です。私にはこの小説が『父と子』への奇妙で不吉な注釈のように思われます。私の頭の中には「カイン、汝の弟はどこにいるのですか？」というかの有名な問いに似たものが浮かんできました。——私はあなたにお聞きしたい。イヴァン・セルゲーヴィチ、あなたはバザーロフをどこへやってしまわれたのですか？ (Там же. 下線部引用者)

ピーサレフは、作家がロシアの生活を主人公リトヴィーノフの目で見、彼の見地から結論を下しているが、「このリトヴィーノフというのは、バザーロフがきれいにしゃべらないようにと要求したものの、その甲斐なかったアルカーヂイ・ニコラエヴィチの輩に他ならないのですよ」 (Там же) と詰め寄る<sup>31)</sup>。批評家はさらに畳み掛ける。

周囲を見渡し自分の位置を定めるために、あなたはこの低く脆弱な蟻塚の上にお立ちになりましたが、また一方あなたの手中にはあなた御自身が発見し、書きとめられた本物の物見やぐらがあるはずです。この物見やぐらをどうなさったのです？ (中略) よもやあなたは、最初にして最後のバザーロフが指の切り傷によって1859年に本当に死んでしまったなどとお考えなのではありませんまいね。(中略) 彼が生きていて無事であり、変わらずにいるということがおそらく全く疑いのないことだとするならば、あなたが彼に気づかないなどというようなことがどうして起こり得たのでしょうか？ (中略) また、もしあなたが彼に気づいていながら総括する際には故意に彼を除外したのだとすれば、言うまでもなく、あなたは御自身でそれらの総括からあらゆる真剣な意義を de propos délibéré [故意に] 奪ってしまったことになります (II, IV, 424-425)。

ピーサレフのこの批判に対してツルゲーネフは早速返事を送り（5月23日付け）、その中で一步も譲らずに反論している。

あなたは、もしバザーロフがたしかに生きている——私はそれを疑いませんが——としても、文学作品の中で彼に触れることはできないのだ，ということがわかりにならなかったのです。彼を扱うのに批判的見地をもってすべきではありませんが、それ以外の見地からというのも不適當なのです。つまるところ、今の彼にできることと言え、自ら姿を現すことしかありません。それでこそバザーロフです。彼が自ら姿を現さないうちは、彼について話をしたり、彼の口を借りて話をしたりするのは全くの気まぐれか偽りですらあるでしょう。この『物見やぐら』は役に立たなくなったのです。そこで私は塚の方を選んだのですが、これは、私の考えでは、あなたがお考えになっているほど低いものではありません。ヨーロッパ文明の高みからでも、ロシア全体を見渡すことができるのです（T(n), VI, 261. 傍点部原文イタリック、下線部引用者）。

この往復書簡には両者それぞれのこだわりが如実に現れており、まことに興味深い。特にピーサレフのバザーロフへのこだわりには凄まじいものがあり、手紙で彼はツルゲーネフをほとんど「変節者」呼ばわりしかねない勢いである。一方ツルゲーネフも「手に負えない札付きの西欧主義者」（закоренелый и заклятый западник. Там же）ポトゥーギンに「根っからの度し難い西欧主義者」（коренной и неисправимый западник. См. T(c), XIV, 100）である作家自身の思いを託しているのが見て取れる。ところで、ピーサレフがバザーロフを追い求めているのに対し、ツルゲーネフは二番目の書簡で「文学作品の中で彼に触れることはできない」、「彼を扱うのに批判的見地をもってすべきではありませんが、それ以外の見地からというのも不適當」、「この『物見やぐら』は役に立たなくなった」旨のみ記してそれ以上何も語っていないが、同じように「時代が変わったのです。今ではバザーロフは必要ないのです」（T(n), X, 295）と述べている七年後のA. П. フィロソフォヴァあての手紙（1874年9月11日付け）に、その説明を聞くことができるように思われる。

目前の社会活動には、特別な才能も特別な知性すらも必要ないのです。つまり巨大なもの、傑出したもの、あまりにも個人的なものは何も要らないのです。必要なのは勤勉さと忍耐です。（中略）しかし、バザーロフはそれでもまだ一つのタイプ、予言者であり、ある種の魅力を与えられ、ある種の栄光を失っていない大人物です。こうしたすべては今では不適當です。（中略）文学においては輝かしい性格の持ち主は、おそらく現れないでしょう。（中略）私たちは、ただ役に立つだけの人々の時代に入ったのです。（中略）ああ、アンナ・パーヴロヴナ、私たちはこれほどまで話題に上っている新しい人々、そのタイプの人々を見ることはないでしょう。国民生活は内的・集団的發展、分解、合成という養成期を経験しているところです。それに必要なのは

協力者 (помощники) であって、指導者 (вожаки) ではありません。そして、この時期が終わりを告げた時に、初めて再び巨大で独創的な人物が登場することでしょう (T(n), X, 295-296. 傍点部原文イタリック, 下線部引用者)

ちょうど『処女地』を執筆中だったツルゲーネフが「指導者」ではなく「協力者」が必要だという時に念頭にあるのはソローミンのイメージに違いないが、作家がこのように英雄の時代の終焉を宣告するという事は、彼自身もまた『その前夜』執筆当時の「事業が前進するためには、自覚的に英雄的な性格の人々が必要だ（したがってこれは、民衆のことを言っているのではありません）」という考え (T(n), III, 354) を放棄することを迫られたことを意味する。このフィロソフォヴァの手紙が明るい自信に満ちたものというよりは、どこか苦衷を漏らすような嘆きの声も聞かれるのは、作家自ら「英雄」の夢から目覚めねばならない苦さのなせる業であろうか。

ツルゲーネフとピーサレフは、『煙』をめぐる往復書簡によって歩み寄りを見せたというよりも、お互いの見解の相違点を際立たせ、立場を確認しあったのだと言えるかもしれない。両者ともに譲らず、その議論は並行線をたどったまま物別れに終わった。とりわけ、それは両者のバザーロフ観の相違を浮き彫りにしており、そこに《ポジティブ・ヒーロー》問題をめぐる19世紀ロシアの批評家と作家の立場が典型的に示されていると見ることもできるが、また両者の書簡はどちらも聖書からのモチーフや先行文学作品へのアリュージョンなどレトリックの粋が凝らされており、表面は穏やかながら、慇懃な言葉使いの背後に火花散る激しい応酬が聞かれる見事な「文学作品」となっていることも指摘しておきたい。

この往復書簡の後、ピーサレフは一度はネクラソフの文集に『煙』についての論文を書いてほしいとの依頼を受けたが、ネクラソフが政治的見解の不一致を理由に断って来たため、それも実現を見なかった。そして、翌1868年7月4日、彼はマルコ・ヴォフチョークとともに訪れていたリガ湾で遊泳中に溺死し、28年に満たないその生涯の幕を閉じた。

#### 4. 「否定」の毒と魅力

ツルゲーネフとピーサレフを結び付けるものとしてどうしても無視して通る訳には行かないのが「否定」である。「ニヒリスト」ピーサレフと「否定」は言うまでもなく切っても切れない関係にあるが、ツルゲーネフという作家は「ニヒリスト」バザーロフを生み出すだけあって、実は「否定」に強い関心を抱き、深い理解をも有していたのである。

例えば、ツルゲーネフが「否定者」バザーロフを悪意をもって送り出したのではないことを説明しようとする研究者がほとんど必ず引用するのが、『父と子』について作家自身が弁明を試みているスルチェフスキイあての書簡(1862年4月14日付け)の中の「私が知っているあらゆる真の否定者たちは、例外なく(ベリンスキイ、バクーニン、ゲルツェン、ドブロリューボフ、スペシネフ等)比較的善良な良家の出身者でした。そしてこの点にこそ大きな意味があるのです。すなわち、これが活動家たちからあらゆる個人的憤慨や個人的苛立ちの影を取り除いているのです」(T(n), IV, 380) 傍点部原文イタリック) という一

節である。この時点で作家はすでにピーサレフの論文『ピーセムスキイ、ツルゲーネフとゴンチャロフ』を（おそらく断片的に）読んでいた（ポロンスキイあての手紙の中で「若者たちは唾を吐いている」と憤慨していたのはすでに見た通りである）。したがって、このスルチェフスキイあての手紙にある「否定者たち」のリストの中にピーサレフの名がないのは、ポロンスキイあての手紙の中でツルゲーネフがピーサレフの論文への不満を漏らしていることと併せて、まだ彼がピーサレフをそれほど高く評価するに至ってはいなかったことの傍証となろう。ツルゲーネフがアンネンコフにあてて、ピーサレフの論文『バザーロフ』がすばらしいと書いてよこすのは、二ヶ月近くたった6月8日のことである。

ツルゲーネフは「否定者」についてのみならず、「否定」という抽象概念そのものについても深い思索をめぐらしていたことが、その発言から窺われる。『父と子』発表に先立つ1860年に行った『ハムレットとドン・キホーテ』という講演の中で作家はハムレットの性格に深い関心を寄せている。彼はまず、ハムレットには「否定の原理」が具現されていると規定した後で、「ハムレットの否定は善を疑っていますが、悪を疑っていないので、悪との激しい戦いを始めます」(T(c), VIII, 183)とハムレットの「否定」の言わば「倫理的」側面を指摘しているが、これは上に挙げた「真の否定者たち」の是認の仕方に通ずるものがある。のみならず、ツルゲーネフには、「否定」は単に「肯定」の反対なのではない、あるいは「肯定」と「否定」が単純で静的な対立関係にあるというのでは済まない、という理解があった。もともとツルゲーネフの「否定」観、更に言えば「肯定/否定」観には弁証法的なところがあつたと言える。彼がもっと若かった1845年に、ヴロンチェンコのロシア語訳『ファウスト』を批評しながらゲーテの作品を論じた文章にはそれが顕著に見て取れる。ツルゲーネフによれば、ファウストは「おのれの過去の子」でありながら、彼に具現されているのはそれとは「相反する原理、すなわち、近代の原理——人間理性の自立性と批判の原理」(T(c), I, 225)であつて、この作品は「ヨーロッパで二度と繰り返されない時期——社会が自己自身の否定に倒達し、あらゆる市民が人間に変じ、古い時代の闘争がついに始まり、人々が人間の理性と自然のほかには何物をも確固不動のものとして認めなかった時期——を最も完全に表現したもの」(T(c), I, 234)である。このような位置付けは、明らかにヘーゲル流の弁証法的歴史観に裏打ちされている。そして、「肯定」と「否定」に関して興味深いのは、メフィストフェレスが「否定の化身」であるということにとどまらず、「メフィストフェレスに具現しているのと同じ否定的要素がファウストにもあること」(T(c), I, 246)、さらに言えば「ファウストがメフィストフェレスその人」(T(c), I, 243)なのであり、「ファウストとメフィストフェレスを一体とする切っても切れない内面的な結び付き」(Там же)が存在すると若きツルゲーネフが指摘していることである。ここでツルゲーネフは「あらゆる原理は、たとえそれが肯定的原理であっても、最初に出現する時には否定的性格を帯びなければならない（さもないと、それはどこにも場所を占めないであろう）」(T(c), I, 226. 下線部引用者)という見事な「否定の哲学」を開陳している。

ツルゲーネフの「否定」についての思索は、この後ぐっと深まり、ただの受け売りではない、彼自身のものとなって行くように見える。青年期特有の抽象的で観念的な議論から

地上の生身の人間へのまなざしを備えた洞察へと成熟して行くのである。講演『ハムレットとドン・キホーテ』においては、ちょうどこの頃からはっきりと現れて来た「人生の悲劇的側面」への注目が作家の「否定」の理解に新たな色彩を帯びさせている。彼は、ハムレットの内に具現されている「否定の原理」そのものはゲーテがあらゆる地上の人間的な要素を捨象して悪魔メフィストフェレスという姿で示したものと同一であることを認める。したがって、「ハムレットはメフィストフェレスその人ではありますが、人間性という生ける輪の中に閉じ込められたメフィストフェレスであります」(T(c), VIII, 183-184)。そのため、ハムレットはメフィストフェレスのような「悪魔的で冷淡な高笑い」をしない。「他ならぬハムレットの苦い微笑の中には物憂げなところがありまして、それが彼の苦悩を物語り、それゆえその苦悩と和解せしめるのです」(T(c), VIII, 184)。そしてツルゲーネフはハムレットの「懐疑的態度」(скептицизм)もまた「無関心」とは違い、そこにその意義と価値があるのだと指摘した後で、次のような洞察をめぐらしている。

ハムレットの懐疑的態度は今日における、言わば真理の実現といったものを信じませんが、虚偽とは徹底的に敵対しており、まさにそれによって、自身が完全には信じかねている真理の主要な擁護者の一人となっております。しかし、否定の中には火と同じ様に物を滅ぼす力があります。——その力の滅ぼすべきものと触れずに置くべきものが往々にして分ち難く一体となって結び付いているような場合には、いかにしてその力を限度内に抑え、いかにしてそれがまさに止まるべき場合を示すことができます。この点にこそ、実にしばしば認められる人間の生の悲劇的な側面が我々の前に立ち現れているのであります。行為のためには意志が必要であり、行為のためには思想が必要です。しかし、思想と意志とは乖離してしまっており、日ごとにますます乖離して行きます……(T(c), VIII, 183. 下線部引用者)

興味深いことに、ピーサレフもまた鋭敏な批評家として、作家ツルゲーネフの「否定」観の深さ、複雑さを見抜いていた。彼は『父と子』における作家の立場について次のように述べている。

彼(=ツルゲーネフ)は、若い世代が父たちと物の理解や愛着が一致するようにと願ったりする訳ではけっしてない。彼は父たちにも子たちにも満足していない<sup>32)</sup>のであって、この場合、彼の否定は、自分たちよりも前にあったものを破壊しては、自分たちは地の塩であり、全き人間性の最も純粋な表れであると思ひ込んでいるような人々の否定よりも深く、重々しい(II, II, 28. 下線部引用者)。

作家ツルゲーネフは「否定」が人を引きつける力とその内にある毒とを痛いほど理解していた。そういうツルゲーネフにとって、論壇にデビューした直後から「破壊することができるものはすべて破壊しなければならない。打撃に耐え得るもののみが役に立つ」(『19世紀のスコラ学』, II, I, 135)、「ロシアにおいては、純粋な否定という道から外れた者は

倒れた」(『ピーセムスキイ、ツルゲーネフとゴンチャローフの中・長編小説における女性のタイプ』, II, I, 271) と言っている「否定の唱導者」ピーサレフ<sup>33)</sup>には独特の魅力があったろうし、彼の発言の行方を関心を持って見つめていたとしても不思議ではない。だがまたしかし、これほど「否定」に思いをいたした、これほどの「否定」の理解者が、ピーサレフの様々な「否定」——当然、プーシキン否定もその中の重要な一つだが——を文字通りそのまま受け止め、それを面白がったり、ただ感情的に反発するだけだったとは信じられないのである。彼は何しろ、そのハムレット論に現れていたように、「否定」の痛み、「否定者」の悲劇というものを熟知していた。それでは、彼の中の「作家」は「否定者」ピーサレフの内面にまで踏み込むことはなかったのであろうか。すでに見たように、ツルゲーネフはボトキン家でピーサレフに会った際に、半ばこの批評家の看板と化していたプーシキン否定について、「あなたにはこんなことを本気で言えるはずがありません——あなたはこれをわざと、何か目的があっておっしゃったのです」と批判したと自身の回想の中で伝えていたが、ツルゲーネフはピーサレフの中に、まさに「思想と意志の乖離」、思想の極端な先行を見ていたのかもしれないと見るのは穿ちすぎであろうか。ともあれ、こうした予感が以下の議論の導きの糸となっている。

## 5. 「リアリズムのロマンチスト」 (1) バザーロフとピーサレフ

これまで見て来たように、ツルゲーネフはピーサレフの『父と子』批評を高く評価していた。ピーサレフの論文『バザーロフ』についてアンネンコフあての手紙(1862年6月8日付け)の中で「『ロシアの言葉』のピーサレフの論文はとてもすばらしいものに思えました」と述べていたのは既に紹介済みだが、その他にも、例えばオストロフスカヤ夫人は作家と『父と子』について話をしている折に彼が「ピーサレフの分析は並外れて巧みなものでした」「彼は私がバザーロフで言いたかったすべてをほとんど完全に理解してくれたことは、認めなくてはなりません」(下線部引用者)と漏らしていたと回想の中で証言している<sup>34)</sup>。しかし、それではまさにピーサレフの批評のどの点について、彼のなしたいかなる指摘、いかなる理解の仕方について作家が発言しているのかということになると、いずれの場合もそれだけでは突き止めがたい。その謎を解く手掛かりになりそうなのは、ピーサレフの悲劇的な死から二年の後、作家が新しい小説(後に『処女地』として現れる)の着想を得た時のメモである。

バーデン・バーデン

1870年7月17日9時45分

新しい小説の構想が頭に浮かんだ。それはこうだ。リアリズムのロマンチストたちがいる(オネーギン<sup>35)</sup>)——プーシキンではなくて、ロールストンの友人の方だ)：彼らは現実的なものに憧れ、それを希求している。ちょうどかつてのロマンチストたちが理想を希求していたように。彼らが現実的なものの中に探し求めているものは詩

ではなく——彼らにとっては詩はばからしいのだ——ある偉大で意味のある何物かである——が、これはナンセンスだ：なぜなら、真の生活とは散文的なものであり、またそうあってしかるべきだからだ。彼らは不幸であり、損なわれている——そしてまさにこの、自分たちの事業に全くふさわしからぬことに自らが損なわれているという感覚によって苦しんでいる。しかしながら、彼らの出現は、あらゆるものがいまだに入門的・教育的な性格を帯びているロシアにおいてのみ可能なことであり、それは有益でもあればどうしても必要なことである：彼らは一種の予言者、伝導者なのだ；だが、自らの内に包含され、規定されるような全き伝導者などというものは考えられない。予言とは病いであり、飢えであり、渇きである：健康的な人間は予言者になることはおろか、伝導者になることもできない。それゆえ私は、バザーロフの中にもこのロマンチズムのかけらを持ち込んだのだが、そのことに気づいたのは一人ピーサレフだけであった (T(c), XII, 317. 傍点部原文イタリック、下線部引用者)。

「リアリズムのロマンチストたち」(романтики реализма)とは本来矛盾する概念を結合させた実に不思議な、それでいて妙に説得力のある言葉である。これについて渡辺雅司は、ピーサレフの論文『バザーロフ』の中の「理想主義に対して武装し、その空中楼阁を打ち砕きながら、時としてバザーロフ自身が理想主義者になっている、すなわち、何をいかに楽しみ、自分の個人的感覚をいかなる尺度に合わすべきかの決まりを人間に命じ始めている」(II, II, 27)という一節を引用して、「ニヒリズムあるいはリアリズムが、理論として絶対化され、理想と化することにより、生身の人間を圧迫するものとなる。バザーロフにおける芸術の否定、余暇の充足の拒絶、愛の拒否、つまりバザーロフの禁欲主義こそ、彼のリアリズムにロマンチズムの要素が忍びこむ隙を与えるものだとピーサレフは考えたのである<sup>36)</sup>」(下線部引用者)と結論している。たしかに、作家が『処女地』のメモで言うようなバザーロフ像をピーサレフの批評の中に探すとすれば、それが最も色濃く現れていると言えるのは『父と子』発表後間もなく執筆された論文『バザーロフ』であろう。しかし、ピーサレフの理解を「バザーロフの禁欲主義」に限定する必要はないのか。さらに言えば、ツルゲーネフの描く「リアリズムのロマンチスト」とは、それが「ちょうどかつてのロマンチストたちが理想を希求していたように」「現実的なものに憧れ、それを希求している」者のことを指すのであるかぎり、本質において「ロマンチスト／ロマン主義者」なのであり、ただその憧憬の向かう方向が「ロマン主義」の嫡子の場合と異なり、天上から地上に、異郷から自国に、詩的世界から散文的世界に置き換えられている、言わば「逆立ちしたロマン主義者」なのである。そして、その「倒錯」のために彼らは病み、傷つき、苦しんでいる。だからこそ、作中ではっきり「ロシアのハムレット」と呼ばれている『処女地』の主人公、「リアリズムのロマンチスト」ネジダーノフに劣らず、バザーロフにもハムレット的な要素の痕跡が今日指摘されるのであり<sup>37)</sup>、それゆえピーサレフが気づいていたようにバザーロフの場合にも「思想と意志の乖離」が見られ、また現実の中ではどこまでも「異邦人」であるため「否応なく孤独のまま残る」(II, II, 30)のである。ピーサレフはバザーロフについて「もしかしたら彼は、言葉の上で否定してい

るものの多くを心の底では認めているのかもしれないし、それに、もしかしたら、こうして認められたもの、このように秘められたものが彼を道徳的墮落から救い、精神的卑小さを免れさせているのかもしれない」(II, II, 9) と漏らしているが、ここにはすでに見たツルゲーネフのハムレット理解に通ずるものがある。また彼は、「問題は、我々の思考は自由だが、我々の行動は時間と空間の中で行われるという点にある。正しい考えと分別ある振る舞いの間には、数学上の振り子と物理学上の振り子の間にあるのと同様の差がある」(II, II, 43-44) とも述べているが、ここには「有限存在」である人間の思考と行為の間の矛盾を見つめる目が感じられる。批評家は後に「バザーロフは、登場した最初の瞬間から私の共感を釘づけにしてしまった。(中略) 彼と同じような主人公たちのうちで、バザーロフに見られるような悲劇的状況に置かれた者は一人としていないからである。バザーロフの状況の悲劇性 (трагизм) は、彼が彼を取り巻くあらゆる生ける人々の中で全く孤立しているという点にある」(II, III, 21) と述懐しているが、この「バザーロフの悲劇性」の理解と共感こそピーサレフを衝き動かしたパトスであり、作家ツルゲーネフに批評家の慧眼を認めさせた点であろうと推測される<sup>38)</sup>。

バザーロフたちの不幸はまた「巨大な力」を持ちながら、逼塞した状況のために、その力を有意義なものに変えるための目的がなく、不毛感を抱きながら生き続けるしかないことである。彼らに出来るのは、せいぜい「思考の領域で自分の無力に復讐する」(II, III, 19) ためにその力を費やすことくらいしかないが、これは自らを傷つけて行くという絶望的な試みでしかない。論文『バザーロフ』の結末で、ピーサレフはバザーロフの悲壯感を自分のものとして受け取め、その絶望を共にしており、そこには自嘲的な調子すら聞かれる。

それでもバザーロフたちがこの世で生きていくのはつらい。(中略) 活動もなければ愛もない、したがって快樂もない。

苦悩することはできないし、泣き言を言う訳にもいかない。ただ時折、空虚だ、退屈だ、無味乾燥だ、無意味だと感じるばかりだ。

それでは一体何をすべきか (А что же делать?) なにしろ、美しく穏やかに死ぬ満足を得るために、わざと自分を感染させることではなかろう。否! 何をなすべきか (Что делать?) 生あるかぎり生きることだ。ローストビーフがなければ乾パンを食い、女を愛せぬ時に女と一緒にいるのだ。そして足元に雪だまりと冷たいツンドラがある時に、みかんの木だの棕櫚だのを夢見たりしないことだ (II, II, 50. 下線部引用者)。

ピーサレフのこの問いに対する答えとしてチェルヌイシェフスキイの小説『何をなすべきか』(“Что делать?” 1863年) が書かれたというのは誰もが指摘することであるが、これはある意味でピーサレフにとっては「運命の皮肉」であった。その小説を読んだ影響の下に論文『リアリストたち』(1864年) が生まれ、ツルゲーネフの『父と子』が解釈し直されるようになり、批評家は以前の自分の立場の修正を余儀なくされたが、後世に悪名高

いプーシキンに対する彼の否定的態度もこの過程で積極的に正当化されるようになったからである。論文『バザーロフ』においては、ピーサレフはバザーロフのプーシキン否定を  
行き過ぎだとはっきり批判していた。したがって、バザーロフ形象の創造に際し、ツルゲー  
ネフがピーサレフをそのプロトタイプとした、ないしはバザーロフの発言にこの批評家の  
主張を響かせたと考えるのには、少なくともプーシキン否定に関するかぎり、無理がある。  
ここでは「ただバザーロフの思想および性格はピーサレフの場合と同じ時代的条件のもと  
に成立したと言いうるのみ」であり、「むしろ両者の思想の共通性の社会的必然性とその  
思想の普遍性が確認されるべきであろう<sup>39)</sup>」とする金子幸彦の賢明な指摘に従いたい。  
ただ、『父と子』という作品が当時の状況や雰囲気（“milieu” と呼ばれるもの）をいやが  
上にも反映している（作家の意識していた程度にこだわる必要はあるまい）かぎり、《ロ  
シアの言葉》誌デビュー当時から「否定」を全面に打ち出していたピーサレフがドブロ  
リューポフやチェルヌィシェフスキイらとともに、その milieu の大事な要素、その「絵」  
の不可欠のひとつまとなっていたことも忘れてはならない<sup>40)</sup>。時代の変化に敏感なツル  
ゲーネフはピーサレフらの議論の行き着く先を先取りしてバザーロフにそれを具現して示  
したのだと言えようが、また逆にゲルツェンがいみじくも指摘したように「彼（＝ピーサ  
レフ）はバザーロフに自分自身と自分の仲間を認め、その書に欠けていたものを付け加え  
た」<sup>41)</sup>（傍点部原文イタリック）という面も否定できない。かくして、『父と子』という  
作品が生まれ、受け入れられて行く過程は、ツルゲーネフとピーサレフ双方の参加と両者  
の緊密な相互作用の下に行われたのである。

## 6. 「リアリズムのロマンチスト」 (2) ピーサレフ対「ピーサレフ」

ツルゲーネフという作家は、小説の登場人物を描き出すのにつねに実在のモデルを必要  
としていたことはよく知られているが、『処女地』の場合、主人公ネジダーノフのモデル  
として、構想メモにも登場した「自滅型」のオットー＝オネーギンの他にピーサレフの名  
も挙がっている。例えば、ブダーノヴァは、オストロフスカヤ夫人がその回想の中で伝え  
ている、作家がポトキンの家で初めてピーサレフに会った時の驚きを引用して、作家がネ  
ジダーノフの形象に「ピーサレフに特有のものである、『ニヒリズム』と育ちの良さ、貴  
族的な物腰との組み合わせ」を反映させた可能性を示唆し、また、ネジダーノフの絶え間  
ない「美学」攻撃もピーサレフに特徴的なことであったと指摘している<sup>42)</sup>。こうしたピー  
サレフを連想させる特徴は、最終的に出来上がった作品の中のネジダーノフの性格、言動  
からも窺い知ることができるが、作家自身が執筆にかかる前に準備した登場人物リストの  
中に何より直接的に示されているので、ここでは少し詳しく見てみたい。以下は、そのネ  
ジダーノフについての記述を訳出したものである。

ネジダーノフ、アレクセイ・ドミートリエヴィチ、1843年生まれ。25歳。

侍従武官長の公爵ゴリーツィン某とその子供達の家庭教師をしていた女との間にで  
きた私生児、女はお産で死ぬ。オットーの容貌——ただ赤毛。驚くほど白い肌、手

足はきわめて貴族的（аристократические）。おそろしく神経質で感受性が強く、自尊心が強い。あるスウェーデン人の寄宿者で教育を受け、その後大学に入る——ニヒリストを憎んでいる父親の意で歴史言語学部に。学士として卒業。父親は彼に銀貨で6000ルーブリ遺す。侍従武官をしている彼の兄弟たちは彼を認めようとはしないが、彼に年に900ルーブリ与える。誇り高く、物思いに耽りがちで激昂しやすいが、勤勉である。気性は一匹狼の革命家のものだがデモクラットの的ではない。そうなるには華奢で優雅（нежен и изящен）すぎる。そのことが自分ではいまいましく、自分の孤独（одиночество）を苦々しく感じており、自分を「美学」（эстетика）に行かせたことで父親を許すことができない。ドブロリュエボフの崇拜者。（ピーサレフからも若干取る。）心を開かず、嫌悪感に満ちているが、冷笑的な人間（циник）たるよう——言葉の上では——自らに強いている。議論の最中、すぐ激しやすい。パークリンとは小食堂で知り合う。その頭脳ゆえ彼を愛す。純潔で情熱的（女性の方面に関して）——そのことを恥じている。性格は悲劇的——そして悲劇的な運命（натура трагическая—и трагическая судьба.）声は気持ち良く、幾分女性的（Т(с), X IV, 318-319. 傍点部原文イタリック、下線部引用者）<sup>43)</sup>。

「ピーサレフからも若干取る」という言い方がかなり決定的であるが、このリストにあるネジダーノフの特徴はピーサレフとの一致点を探すよりも相違点を挙げたほうが早いからである。批評家には全く当てはまらないのは、ネジダーノフの出生と教育、彼が「ドブロリュエボフの崇拜者」とされていることであるが、このうち初めの二つの点はオットー・オネーギンの伝記的事実から取られたものと考えられるし、三番目の点については、ピーサレフはドブロリュエボフに対してはライヴァル雑誌の論客として彼の死後も論争的に接しており、およそ「崇拜者」とは言えないが、ここでは「ドブロリュエボフ」という名前そのものにそれほど意味があるとは思えない。「急進派の批評家」を代表していると考えてよいのではないか。一方、下線を施した部分は、ネジダーノフのみならず、ピーサレフについてもほぼ共通して同じことが言える特徴である。二人とも「歴史言語学部」に入学し「学士」として卒業（批評家は銀メダルを授与された）し、「神経質」で「自尊心」が強く、「貴族的な」手足、全体に「華奢で優雅」だが、「孤独」であり、「激昂しやすい」ところもある。二人は全体に繊細で「貴族的」、そして神経質でどこか女性的な印象を共有している。また、ネジダーノフは1843年生まれとされているが、ピーサレフは1840年生まれである（もっとも、オットー＝オネーギンも1845年生まれなので、ネジダーノフに近い。またちなみに、ドブロリュエボフは1836年生まれなのでかなり離れている）。意味深長なのは作中繊細すぎるネジダーノフが1868年夏に自殺によって生涯を終えることで、四年半に及ぶ要塞監獄幽閉を解かれ「自由な世界に移ったことで、神経系統の全体が衝撃を受けた」ピーサレフも同じ1868年に遊泳中の事故で亡くなるという「悲劇的な運命」を迎えている（しかも、当時自殺ではないかという噂も流れていた<sup>44)</sup>）。オットー＝オネーギンは1929年まで長生きしたので、この二人とは全く異なる。かくして、性格のみならず生涯の軌跡に関しても、ネジダーノフはピーサレフにきわめて似通っていると見てよい。

パークリンに「リアリズムのロマンチスト」、「ロシアのハムレット」と呼ばれるネジダーノフは絶えず自分の心の中をのぞきこんでいる「反省家」で「憂鬱質」でもあり、内面は神経質で繊細であるにもかかわらず「言葉の上では無理に冷笑的に、粗暴になろうとしていた」（第4章）。したがって彼の心は分裂して行き、「内部にひそむ秘密の虫がネジダーノフの心を食い荒らし、かじり続け」（第11章）、ついに民衆との初めての接触に失敗したことによってすべての矛盾が噴き出し、破局を迎えることになる。碎滅する直前にネジダーノフはマリアンナに「僕の中には二人の人間が座っているんだ——そして一方がもう片方を生かそうとしないんだよ。だから、いっそどちらも生かすのを止めてしまった方がいいと思うんだ」（第36章。T(c), XII, 279. 下線部引用者）と自らの秘密を明かし、自分がもはやナロードニキの「事業」を信じていないことを告白し、自ら命を断つ。ネジダーノフの悲劇は必ずしも心から信じている訳ではないものに身を捧げようとした「自己欺瞞」の悲劇であるが、しかも、自分の内面と外面のずれを自ら強く意識していたために、なおさら救いがなかった。彼は明らかにツルゲーネフが描いて来た「余計者」の系譜に連なる形象であり、その複雑で矛盾した人格は「リアリズムのロマンチスト」の名にふさわしい。

ところで、我々は前節で作家自身の言葉に導かれ、バザーロフの中にも「リアリズムのロマンチスト」の要素があるのを確認した。ピーサレフがバザーロフについて言った「もしかしたら彼は、言葉の上で否定しているものの多くを心の底では認めているのかもしれない」（II, II, 9）という言葉は、ネジダーノフの場合と実によく呼応する。批評家のこの言葉についてゲルツェンは「ピーサレフは自分のバザーロフの心は隅々まで知りつくしており、彼のために告白した」ものであり、「他人の心の中をこんなに奥までのぞきこんだこの慎みのなさを、我々は重要なことと考える」<sup>45)</sup>と述べたが、筆者も同様に考える。ピーサレフの発言は、バザーロフのことを自分自身と同じくらいよく分かっている者でなければできないものであろう。それでは、そのピーサレフ自身には「言葉の上で否定しているものの多くを心の底では認めている」というようなことは全くなかったのだろうか。ツルゲーネフはボトキン家でピーサレフに会った時に、批評家がプーシキンの詩をこきおろしたことについて、「あなたは美的感覚が鋭すぎるくらいの方です。あなたにはこんなことを本気で言えるはずがありません——あなたはこれをわざと、何か目的があつておっしゃったのです」（T(c), XIV, 36. 傍点部原文イタリック）と疑いをはさんでいた。また、批評家自身、「もし批評界と読書界がプーシキンのロマンを彼自身が解していたように解し、彼らが彼のことを『ヌーリン伯』だとか『コロームナの家』のような罪のない、無益なものに見なしていたなら、もし彼らがプーシキンを、彼にはいささかの権利もない台座に据えず、彼が解くことはおろか自らに課すことすら全く出来もしなければ望みもしないような大課題を彼に押し付けなかったら、——それなら私とて、我らの所謂大詩人の作品についての不遜な諸論文によってロシアの美学者たちの感じやすき心を掻き乱そうなどは思いもよらなかったであろう」（II, III, 362-363）と自分の発言がポレミカルな意図によるものであることを漏らしていたこともあった。

詩人 Я. П. ポロンスキイは1867年の《祖国雑記》に『詩的な種の散文的な花』（“Прозаические цветы поэтических семян”）と題する論文を書いてピーサレフを論じた。彼は

そこです、ピーサレフの主張が彼（＝ポロンスキイ）が青年時代に書いたことと軌を一にしていることを例を挙げて示し、「彼（＝ピーサレフ）はまるで、私の青春時代の詩的熱中が彼に遺言したことを執行しているにすぎないかのようである<sup>46)</sup>」と述べた後、ピーサレフが「顕微鏡的詩人たち」と呼んだプーシキン以後の詩人たちの作品を見れば、「ピーサレフ氏というのは多くの点で彼らの叙情的作品の中に撒き散らされた詩的な種が散文的に開花したものに他ならない」（下線部引用者）<sup>47)</sup>ことに誰しも気づくであろうというユニークな指摘をしている。このポロンスキイの「詩的な種の散文的な花」という言葉にはその語結合の仕方からしてもツルゲーネフの「リアリズムのロマンチスト」に通ずるものがある。ポロンスキイはその言葉で批評家ピーサレフの矛盾点を指摘しようとし、一方ツルゲーネフはネジダーノフの形象を性格づけるのに言葉を見つけた。その冷笑的な発言とは裏腹にピーサレフは美的感覚が鋭いことをツルゲーネフが認めていたように、ポロンスキイも「バザーロフの死の描写の芸術的出来映えに、ピーサレフ氏はただ美学者のみにふさわしい仕方では恍惚としている<sup>48)</sup>」と指摘している。我々はすでに「リアリズムのロマンチスト」ネジダーノフが容貌、態度の多くと伝記的事実、性格の主要点においてピーサレフをモデルにしていることを見て来た。それでは、ポロンスキイがピーサレフに「詩的な種の散文的な花」を見て取ったように、ツルゲーネフは「リアリズム」の唱導者たるピーサレフその人に「リアリズムのロマンチスト」の匂いを嗅ぎ付けることはなかったのだろうか。ピーサレフと会った時に作家が彼を問い詰めた言葉には、この批評家の「思想と意志の乖離」を疑っている節があるとは言えないだろうか。さらに、『処女地』の舞台が1868年のペテルブルクから始まり、その年の夏のネジダーノフの自殺で終わるというのは、自殺という噂も流れたピーサレフの悲劇的な死が同じ1868年だったことを考え合わせると、単なる偶然の一致として片付けることのできないものを感じるのである。その意味では、『処女地』という小説はピーサレフへのレクイエムと読めないこともない。もっとも、残念ながらこの問題について現在のところツルゲーネフの真意をうかがう術もなく、すべては憶測の域をでないのではあるが。

## 7. 《ピーサレフ神話》

ピーサレフには、「一足の長靴のほうが、シェイクスピアの悲劇よりもはるかに重要だ。ひとりの靴屋はラファエルにまさる」と言った「ニヒリズム」の批評家<sup>49)</sup>という《神話》も生まれた。ピーサレフが全くこの通りのことを述べたことなどないのは、渡辺雅司も指摘する通りである<sup>50)</sup>。それどころか、批評家は、「我々は詩人に『靴を縫え』と言ったり、歴史家に『ピログを焼け』などと言うつもりはさらさらない」(T(c), III, 92)と明言している<sup>51)</sup>。おそらく、批評家が打ち消す意図や条件付きで口にした言華が一般読者にはその部分だけ強烈な印象をもって記憶され、それらが「ラファエルなんて半コペイカ銅貨ほどの値打ちもありません」(『父と子』第10章)というバザーロフの不遜な発言と混同され、絶妙に組み合わせられて、上に挙げたような《神話》が生まれたのではないかと推測される。もっとも、受容史という観点かられば、そのような事実関係の微細に立ち入ること

は、あまり意味のあることは言えない。そこではピーサレフが実際にどう言ったかということよりも、彼がどう言ったと思われているかが、すなわち、人々の間に生まれ、受け継がれて行った「ピーサレフ」のイメージこそが問題とされているからである。

『処女地』が発表された翌年、ピーサレフの悲劇的な死から10年あまり経ってから、我々はツルゲーネフが手紙の中でもう一度ピーサレフに言及しているのに出会う。パリからアンネンコフにあてた書簡（1878年1月21日付け）で、作家は面白いエピソードを披露している。

私は当地でなかなか頭の切れる30代の一人のロシア人と知り合いました。私に打ち明けてくれたところでは、この男、若い頃は詩とプーシキンを愛し、ヴァイオリンを弾いたり、絵を描いたりしていたのですが、——ピーサレフの影響で何もかも放り出し（そうしたのは彼一人ではありませんでしたが）——今ではすっかり二進も三進も行かなくなり、何を頼みとしたらいいのかわからず、ただ溜め息をつくばかりです。まったくこれだから、言葉の力を否定できるものなら否定して御覧なさいと言うのです！（T(m), XII-1, 268. 下線部引用者）

ここに紹介されている男の話は、ピーサレフがロシア知識人層に与えた衝撃とその影響力の程が窺われる実に象徴的なエピソードであると言えよう。ピーサレフの思想はその死後もロシアを席卷しており、ピーサレフ主義（Писаревщина）と呼ばれるピーサレフ信奉者・エピゴーネン集団が生まれていた<sup>52)</sup>。当時の雰囲気象徴的に示す事件をもう一つ紹介しておこう。

上に引用したツルゲーネフの手紙の書かれた少し前、1877年の年末にネクラースフが亡くなった。12月30日に執り行われた葬儀で、ドストエフスキイが追悼の辞の中でネクラースフはプーシキン、レールモントフに次ぐものだと述べたところで会葬者の間から「ネクラースフはプーシキン、レールモンよりも上だ。彼らはバイロン主義者だったにすぎない……」という声が上がるとい一幕があった<sup>53)</sup>。プレハーノフは後に、それが彼自身と仲間の革命家たちの反発であったことを認めている（『ネクラースフの葬儀』、1917年）。彼自身の証言するところによれば、ドストエフスキイが「その才能において、ネクラースフはプーシキンに劣らなかった」と述べたのが「目に余るほど不当なこと」に思え、『『彼はプーシキンよりも上だ！』と我々は一斉に大声で叫んだ』のだと言う<sup>54)</sup>。この葬儀ではプレハーノフ自身も秘密結社《土地と自由》を代表して追悼の辞を述べることになっていた。彼はその演説を、ネクラースフはムーザの脚を称えるのに甘んじず、その詩に市民的モチーフを導入したという指摘から始めた時、プーシキンを当てこすりするつもりであったことを認めた上で、「私は彼（＝プーシキン）に対して全く間違っていた」と告白している。

けれども、当時の我々を取り巻いていた風潮はそんなものだったのだ。我々はみな多かれ少なかれ、有名な『プーシキンとベリンスキイ』という論文の中で我々の大詩

人を「完膚無きまでにやっつけた」ピーサレフの見解に同調していたのだ<sup>55)</sup>。

ネクラースフの葬儀から二年あまり経った1880年、プーシキン銅像除幕式に際して行った演説の中で、ツルゲーネフが「プーシキンの名前など忘却されるべき運命の他の多くの名前の中の一つでしかなかったような幾つかの世代が、我々の目の前を相次いで通り過ぎて行ったことを、我々は忘れるべきではありません」(T(c), X V, 75)と言う時、彼もまたその間の事情について触れているのだ。彼はプーシキンの死後、「肯定的な詩人」の時代から「否定的な詩人」の時代になり、「復讐と悲哀の詩人」の声が響き渡ったと、名指しは避けているもののネクラースフを示唆している。その彼が「他ならぬ最初の主要なプーシキン解説者であるベリンスキイが、詩をあまり評価しない他の審判者たちと交替しました」(T(c), X V, 73-74)と述べる時には、当然ピーサレフのことも念頭にあったことだろう。彼が青年層へのピーサレフの批評活動の影響を憂慮していたことは、ボトキン宅での会見の際、批評家の責務について質したことからも窺える。これは、革命後に詩人ホダセーヴィチがいみじくも名づけたところの「プーシキンという太陽の最初の日食」だったのである。

ロシア文学史においては、すでにピーサレフがプーシキンを無用で取るに足らないと宣言して、彼を「厄介払いした」時期がありました。しかし、ピーサレフ的な傾向は広範囲の読者を引き付けるところならず、じきに消え去ってしまいました。その時から、ピーサレフの名は苛立ちや憎しみすら伴って口にされたことも一再ならずありましたが、この憎しみというのは文学鑑賞者にとっては自然であるものの、善悪に対して冷淡な文学史家にとってはありえないものであります。プーシキンに対するピーサレフ流の態度は、愚かしく悪趣味なものです。しかしながら、それは当時の雰囲気によっていたイデーに耳打ちされたものなのであり、ある程度までは時代精神を反映していたのです。ですから、ピーサレフは自身の思いを述べていた時に、ロシア社会のある部分の見解を表わしていたのであります<sup>56)</sup>。

ピーサレフがプーシキンを玉座から引きずり下ろした論文『プーシキンとベリンスキイ』(1865年)については今日、ソヴィエトの学者たちは「歴史的意義の展望を欠いた、詩人の作品に対する辛辣にして誤った評価を含み、きわめて強いポレミカルな精神に満ちた」<sup>57)</sup>ものというように概ね否定的な評価を下しているが、西欧には反対に「素朴ではあるが、今でも楽しく読むことができよう。それは健全な態度で自己を偽らぬ、忌憚ないものである。いずれにしても、ピーサレフはそこで、ベリンスキイによる大詩人の観念論的な解釈が全く誤りであることをとてもよく示している」<sup>58)</sup>と評価するミールスキイのような知の勝った文学史家もいる。しかし、このような見方はまれであって、ある研究者などは「今日でもプーシキンの作品の崇拜者は、ピーサレフの攻撃を読んだ後ではどうしてもプーシキンに対して全く同じ気持ちではいられない。それほどまでの迫力をもって言い立てられているのである」<sup>59)</sup>とまでピーサレフのペンの力を強調している。いずれにしても、「華奢」で「小さな」ピーサレフのペンが大家ドストエフスキイ、ツルゲーネ

フをして憂慮せしめたことは、紛れもない事実なのである。

バザーロフの形象がピーサレフの直接の影響のもとに生まれたとは言えないとしても、両者の思想が「同じ時代的条件のもとで成立」し、「共通の社会的必然性」を孕んでいたとすることができるのなら、バザーロフの後を追う形になったピーサレフによるプーシキン否定も当時の状況を強く反映させた、時代の産物と見なされるべきであろう。しかし、詩人に対する冷淡な態度は、この国ではピーサレフの「野蛮行為」が最初で最後という訳ではなかったということも忘れてはならない。確かに1860年代にその突出が見られるものの、それはロシア文学史・文化史の中で少しずつその姿を変えながらも繰り返し現れて来たのである。すでにプーシキン自身が有名な『詩人と大衆』(1828年)や『詩人に』(1830年)等の詩の中でそうした傾向を逸速く感じ取って反応していたし、ツルゲーネフは60年代に突出を見らその傾向を先取りしてバザーロフにそれを具現してみせ、それと相互作用する形でピーサレフの極論が現れたのだと言うこともできよう。ツルゲーネフは1880年の講演で、プーシキン自身が生前に読者が冷淡になるのを予感していたことを認め、しかしその原因は詩人自身が『詩人に』という詩の中で言うような「愚人の判断」や「大衆の冷たい笑い」にあったのではなく、「社会の歴史的発展」の中に、「文学的時代から政治的時代に入る新しい生活が生まれる諸条件」( T(c), XV, 73)の中にあっただとしていた。だが、その彼も、60年代の嵐が過ぎ「青年たちがプーシキンを読み、研究するように戻りつつあるという喜ばしい事実」( Там же) に注目して未来に期待を寄せるばかりで、その後再び同じような傾向が現れようとは想像もしていなかったようだ。作家の講演から40年あまり経た1921年のプーシキンの夕べで、革命を体験した詩人ホダセーヴィチは「プーシキンという太陽」の「第二の日食」が間近いのを予感している。彼はそこで奇しくもツルゲーネフが取り上げていたのと同じプーシキンの詩『詩人に』の最終連を引用し、大衆が詩人の「祭壇に唾する」ことはもうないだろうが、きっと詩人の「鼎」を「子どもっぽくふざけて揺さぶる」ことになるだろうと予言している<sup>60)</sup>。

## — 注 —

- 1) Moser Ch. A. *Esthetics as nightmare : Russian literary theory, 1855-1870*. Princeton University Press, 1989. xviii.
- 2) Гуральник У. А. “Писарев” — В кн.: *История русской критики в двух томах*. М. -Л., 1958, Том II, стр. 220.
- 3) 例えばカミュの『反抗的人間』には次のような一節が見られる。「自己を満足させないものはなんによらず否定するピーサレフは、哲学や、彼が無用なものと判断する芸術や、嘘多き道徳や、宗教や、さらには慣習や礼節に対してまでも戦いを宣する。彼は、知的テロリズムの理論をうちたてるのであるが、これはフランスのシュールリアリストたちの文学的テロリズムを思わせる。挑発行為は教義としてたてられるが、それがどれほど凄じいかは、ラスコリニコフをみれば、はっきりわかろう。見事な飛躍の頂上にいるピーサレフは、にこりともせず、実母を擲り殺してもいいかという質問を提出し、『もし私がそれを望み、それが有益だと思ふなら、いけないわけがあるか?』と答える」(カミュ, 佐藤朔・白井浩司訳, 『反抗的人間』, 新潮社, 1973年, 138頁。
- 4) Писарев Д. И. *Сочинения в 4 томах*. М., 1955-1956, Том 2, стр. 24-25.  
以下このテキストから引用する時は、頭文字 П を添えて巻番号をローマ数字、ページをアラビア数字でそれぞれ示すことにする。例えば、上に挙げた箇所ならば (П, II, 24-25) となる。
- 5) 拙稿『ピーサレフのツルゲーネフ論—「ポジティヴ・ヒーロー」をめぐって』(修士論文) はまさにこの問題に捧げられている。
- 6) Бельчиков Н. “Базаров в понимании Писарева (К столетию со дня рождения Писарева)”, *Литературная учёба*, 1940, No. 11, стр. 39-60.  
なお、渡辺雅司の論考「ピーサレフとバザーロフ(1) — ニヒリスト・ピーサレフの誕生からバザーロフとの出逢いまで—」(札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』, 第9巻2号, 1976年) もアプローチの仕方はこれに近いが、ピーサレフの論文『バザーロフ』までが対象となっている。
- 7) Четуннова Н. “Добролюбов и Писарев — критики Тургенева” — В её кн.: *В спорах о прекрасном*. М. 1977, стр. 57-92. (なお、この論考の初出は1938年である)
- 8) Конкин С. С. “Тургенев и Писарев” — В кн.: *Из истории русской и зарубежной литературы*. Саранск, 1976, стр. 36-77.
- 9) Ефимова В. М. “Тургенев и Писарев”, *Учен. зап. Курского пед. ин-та*, 1968, Т. 51, стр. 108-127.
- 10) *Там же*, стр. 125-126.
- 11) ここに挙げた文献の他にツルゲーネフとピーサレフの二人に焦点を当てたものには以下のものがあることも知られているが、筆者は未見である。  
Ефинова Е. М. “Творчество И. С. Тургенева в оценке Д. И. Писарева” *Орловский альманах*, Орёл, 1952, кн. 4, стр. 137-151.  
なお、これと区別するため、以下で9)の文献を引用する時は、著者名の後に“Тургенев

и Писарев” を添えてからページを示すことにする。

- 12) Тургенев И. С. *Полное собрание сочинений и писем в 28 томах*. М.-Л., 1960-1968, Письма, Том 4, стр. 57.

以下このテキストから引用する時は、頭文字 T に作品ならば (с) を、書簡ならば (п) をそれぞれ添えて、巻番号をローマ数字、ページをアラビア数字でそれぞれ示すことにする。

- 13) ちなみに、この手紙の存在は、上の注 6) ~ 注 9) に挙げたツルゲーネフとピーサレフの関係をテーマとした論考の中では触れられていない。

それにしても、このずっと後、批評家が要塞監獄での監禁を解かれてから最期の日々をマルコ・ヴォフチョークとともに過ごしたことを考えると、ツルゲーネフ、ピーサレフとウクライナ語で作品を書いたこの女流作家の三人をめぐる不思議な縁に思いをいたさずにはいられない。

- 14) この手紙はパリからのものなので、現地の日付では 2 月 5 日になるが、記述を一貫させるため、本稿ではツルゲーネフが国外にいる場合も含め、すべてロシア暦で表示することにする。

- 15) См. T(п), IV, 612-613. (注釈者は Т. П. Горовая-Нова является) なお、エフィーモヴァもこの見解を支持している。

См. Ефинова Е. М. “Тургенев и Писарев”, стр. 110-111.

- 16) ツルゲーネフは小説『父と子』の原稿をすでにこの年の夏にカトコフの《ロシア報知》誌に渡しているのですが、ここでピーサレフが「父」(отцы) と「子」(дети) という言葉を用いているのは偶然と考えるしかないが、当時「余計者」と「新しい人々」をめぐる論争などに見られるように「世代」という問題に関心が高まっており、時代の動きに敏感な両者がそれぞれ独自にその問題に反応したものと見ることもできる。後にピーサレフは論文『バザーロフ』において「要するに、ペチョーリンたちには意志があって知識がなく、ルーヂンたちには知識はあるが意志がなく、バザーロフたちには知識も意志もある」(II, II, 21) と類型化をしているが、これはツルゲーネフが『父と子』のエピグラフとして当初予定しながら結局発表しないまま終わったアネクドット、「若者が中年に『あなた方には内容があったが、力がなかった』/ 中年が若者に『だが、あなたたちには力はあるが内容がない』」(См. T(с), VIII, 446) と、完全な一致は見ないものの、関心の方向に等しく通ずるものがある。

- 17) その他、後には見られぬ「ピーサレフ氏」(г-н Писарев) という呼び方にも距離が感じられる。

- 18) ピーサレフの論文を送ってくれというツルゲーネフの要請に対し、アンネンコフは、「一体それだけの値打ちがあるのだろうか」と答えて、皮肉な見方を隠さない (1865 年 2 月 18 日付けツルゲーネフあて書簡)。См. T(п), V, 672.

- 19) したがって、筆者が先に引用した「若者たちは唾を吐いている」というポロンスキイあての手紙 (1862 年 1 月 24 日付け) が「我々に知られているツルゲーネフのピーサレフ評価のうち、無条件の非難を含んだ唯一のもの」であり、「以後は、ピーサレフの批評の傾向を完全に受け入れるという訳では決してなかったが、ツルゲーネフは彼に対して真剣に、ある意味では共感さえ抱いて接した」とするエフィーモヴァの議論は不正確としなければならな

い。См. Ефинова Е. М. “Тургенев и Писарев”, стр. 111.

- 20) ピーサレフは「美学」(эстетика)という言葉はかなり広義に用いている。論文『リアリストたち』(1864年)によれば「美学, 無意識性, ルーチーン, 習慣, — これらはすべて全く同等の概念であり, リアリズム, 意識性, 分析, 批判, 知的進歩は, 前者とは正反対の同じく同等の概念である」(П, III, 61)。彼は「リアリズム」を「利益(польза)への完全に首尾一貫した志向」と定義し, それは必然的に「厳しい知力の節約を, すなわちいかなる利益をもたらさない全ての知的営為の恒常的な拒否をもたらす」(П, III, 20)とする。そして, 「美学とリアリズムは実際, 非妥協的に反目しており, リアリズムは, 現在学術的作業の最高領域から始まって男女のごくふつうの関係までを損ない, 無意味なものにしている美学を徹底的に根絶しなければならない」(П, III, 58)という主張がピーサレフの以後の中心課題となる。一方『美学の破壊』(1865年)はチェルヌイシェフスキイの『現実に対する芸術の美学的関係』の第二版が出たことを受けて, それをピーサレフ流に敷衍してみせたものであり, したがってそこでは学の一部門としての「美学」の存立が問われているのであって, 『リアリストたち』におけるそれとは厳密には区別される。もっとも, ピーサレフはこの二つの「美学」を読者の前でおそらく意識的に混同して「美学」への破産宣告を下し, もって自らの目的を達しようとしたのであろうことは十分想像される。

21) См. П, IV, 458.

- 22) ピーサレフの訪問は, 《ロシアの言葉》誌に代わって刊行されていた《事業》誌の編集部を代表して, 作家に掲載作品を依頼する目的のものだったようだ(注30の手紙を参照)。

23) Ефинова Е. М. “Тургенев и Писарев”, стр. 117.

ところで, ツルゲーネフの「偉大なピーサレフ」という言い方は, ドストエフスキイの『悪霊』のためのスケッチの中に現れる, 見掛け上それとは正反対の言葉「小さなピーサレフ」(маленький Писарев)を思い出させる。「公爵夫人」の家で彼女と「グラノフスキイ」(小説ではステパン氏)と「大学生」(同ピョートル・ヴェルホーヴェンスキイ)が会食する場面がある。

「小さなピーサレフ」

「どうして『小さなピーサレフ』なんて言うんですか? ピーサレフは背が高くはありませんでしたが, 小さくもなかったでしょう?」

「『小さい』なんて言ったかな? (まるで自分でも驚き, はっとしたように) どうしてそんな言葉が口を突いて出たのか, わからない。でも, それがピーサレフには合っているような気がする。私は背丈のことを言おうとしたのでも, その他のことを言おうとしたのでもないのだけれど, どういう訳か彼の全体が小さいような気がしたんだよ。全体の印象がどこか小さいという感じだったんだ……………」

「それじゃ, あなたは巨人という訳だ」(突然, 大学生が言う)

「私, ピーサレフがとても気に入りましたよ」と, 公爵夫人が述べた。

(Достоевский Ф. М. Полное собрание сочинений в 30 томах. Л., 1974, Т. 11, стр. 72.)

- 24) Островская Н. А. “Воспоминания о Тургеневе” — В кн.: Тургеневский сборник под ред.

Н. К. Пиксанова, стр. 94.

25) Там же, стр. 95.

26) Там же.

27) ツルゲーネフがここで言っているのは、ピーサレフが論文『プーシキンとベリンスキイ』の中でプーシキンの詩『10月19日』（1825年）の最終連をあえて散文訳して見せたことである。この詩は、ミハイロフスコエに蟄居を命ぜられているためにリツェイ入学記念日の同窓会に出席できない詩人がその日の思いを歌ったもので、最終連は友だちがみなこの世を去ってただ一人残った未来の最後の友人の姿に現在の自らの境遇を重ね合わせながら、この記念日には「たとえわびしかろうとも喜びを抱き」盃をほしてほしいと呼び掛けたものである。ポレミカルなピーサレフは、ベリンスキイがこの最終連を「莊嚴な響きの良い和音」と呼んでいることに殊更に挑みかかり、それを普通の言葉に翻訳すれば「不幸な友よ！もし君が一人残ったならば、食事の席でへべれけに酔っ払うよう努め、食後は翌朝までずっと寢床でごろごろしているがいい」（П, III, 386）という「おやすい御用の忠告」が得られるとしている。

28) ツルゲーネフは、ドブロリューボフも、例えばカヴァールに対する激烈な非難に及ぶ際、その理解が欠けていたと批判している（См. Т(с), XIV, 34）。

29) その活躍した時代を振り返って、「ベリンスキイは否定者（отрицатель）であるのと同じだけ理想家（идеалист）でもあった。彼は理想の名において否定したのだ」（Т(с), XIV, 42）と作家が言う時、そこに聞こえるのは、青年時代にドイツ観念論哲学の洗礼を受けた40年代作家からドブロリューボフ、ピーサレフをはじめとする唯物論的傾向の強い60年代急進派批評家たちへの批判であり、不満の声である。

30) 実はこのピーサレフへの書簡の前日に、作家はアンネンコフにあてて新作の中編小説『旅団長』を発表する雑誌を探してほしいと依頼する手紙を出し、その中でピーサレフにも触れているので、それがきっかけで彼に手紙を書くことを思い立ったというのは大いにありそうな話である。

参考までにお伝えしておきますが、ピーサレフは私のところに来た時、《事業》誌の編集部を代表して、何か彼らの雑誌のための作品はないかと尋ねました。ピーサレフ、ドミートリイ・イヴァノヴィチは、ベテルブルクのマーラヤ・ドヴァリャンスカヤ街のズーエフの家に住んでいます。その気になれば、彼を呼びに遣るのもよろしいでしょう。彼はきっと来ます。大変興味をそそる人物ですよ——私の「労作」を載せる載せないは全く別にしても（Т(п), VI, 250-251）。

31) ツルゲーネフは二番目の書簡で、ピーサレフがポトゥーギンのことを言うつもりで間違えてリトヴィーノフの名を挙げているのであろうとの疑いを表明しているが（См. Т(п), VI, 261），これは、当時「西欧主義」対「スラヴ主義」という問題に心を奪われ、自ら「西欧主義者」を任じていた作家が、作家がリトヴィーノフの立場に立っているというピーサレフの指摘に神経質に反応したものと見るべきであろう。もっとも、逆に批評家として「バザーロフ」かそれ以外か、という見方しかできなくなっているという批判の余地はありえよ

- うが。
- 32) (原文) Его не удовлетворяют ни отцы, ни дети. この言葉は、作家がある御婦人に『父と子』(《Отцы и дети》) という小説の本当の題名は『父でもなければ、子でもなく』(《Ни Отцы, ни дети》) でしょうと指摘されたという話を思い出させる (См. Т(с), X IV, 103)。
- 33) ピーサレフには『否定的理論の普及者たち』(《Популяризаторы отрицательных доктрин》) なる論文もある。実際、ピーサレフを今日なお刺激的に感じさせるものは、「美学」を否定したこの批評家の「否定の美学」である。
- 34) Островская Н. А. Указ. соч., стр. 80.
- 35) アレクサンドル・フョードロヴィチ・オットー＝オネーギン (1845-1925) は、ジュコーフスキイの庶子で、ペテルブルク大学卒業後パリに移り住み、ツルゲーネフともそこで知り合った。作家は彼のことを「自滅型」と呼んでいる。彼の伝記ならびに『処女地』の主人公ネジダーノフとの関係については以下の文献を参照されたい。  
Чистова И. С. "О прототипе главного героя романа И. С. Тургенева 《Новь》 (Из творческой истории романа)", *Русская литература*, 1964, No. 4, стр. 174-177.
- 36) 渡辺雅司, 『美学の破壊—ピーサレフとニヒリズム—』, 白馬書房, 1980年, 116頁。
- 37) См. Кин В. П. "Гамлетизм и нигилизм в творчестве Тургенева", *Литература и марксизм*, 1929, No. 6, стр. 71-116.  
また, D. ロウはハムレットのみならずロマン主義的主人公一般の要素がバザーロフの中にあることをかなり詳細に論じている。Lowe D. *Turgenev's "Fathers and sons"*. Ardis, 1983, pp. 61-70.
- 38) ツルゲーネフはスルチェフスキイあて書簡 (1862年4月14日付け) やドストエフスキイあて書簡 (同年4月22日付け) の中でバザーロフを (作者の意図を) 理解したのはドストエフスキイとボトキンだけだと述べ、しかも前掲のドストエフスキイあて書簡の中では「私は彼 (=バザーロフ) において悲劇的人物を示そうとした」(Т(п), IV, 385) と自分の意図を明言している。なお、これらの手紙には『父と子』の理解者としてピーサレフの名が挙がっていないが、作家がまだ彼の論文『バザーロフ』を読んでいなかった可能性がある。作家がアンネンコフにあてた手紙の中でこの論文を評価したのは、6月8日付けである。
- 39) 金子幸彦, 「バザーロフ論」, 『スラヴ研究』, 第2号, 1958年, 25頁。
- 40) バチュートはツルゲーネフの所謂「パリ草稿」を研究して、『父と子』第21章にある干し草の山の陰でのアルカーダイとバザーロフの会話 (「へえ, すると正直ということもやはり感覚かね?」「もちろんさ!」) が草稿の余白に書き込まれた時期が『19世紀のスコラ学』から数カ月後のピーサレフの一連の論文の掲載された頃に当たるとして、ピーサレフ的傾向の反映の可能性を探っている。ただし彼は賢明にも、その「反映」がごく限られた程度においてであると条件をつけ、しかもその場合のピーサレフの思想とは「俗流唯物論の唱道を伴った『哲学の破壊』」に関わるものであって、多くの研究者が考えているような「芸術の否定」「美学の破壊」はこの時点ではありえない、と正しく指摘している。  
Батюто А. "Парижская рукопись романа И. С. Тургенева 《Отцы и дети》", *Русская литература*, 1961, No. 4, стр. 72-74.

- 41) Герцен А. И. “Ещё раз Базаров” — В его кн.: *Сочинения в девяти томах*. М., 1958, стр. 379.
- 42) Буданова Н. Ф. *Роман И. С. Тургенева 《Новь》 и революционное народничество 1870-х годов*. Л., 1983, стр. 120-121.
- 43) このメモにある記述は、小説の第4章におけるネジダーノフの伝記・性格説明にもう少し拡充されて用いられている。
- 44) См. Коротков Ю. Н. *Писарев*. М., 《Молодая гвардия》, 1976, стр. 355.
- 45) Герцен А. И. *Указ. соч.*, стр. 380.
- 46) Полонский Я. П. “Прозаические цветы поэтических семян”, *Отечественные записки*, 1867, апр. -2, стр. 717.
- 47) *Там же*, стр. 721. なお、ポロンスキイの論文が発表されてからほぼ一年後、ツルゲーネフは彼にあてた手紙（1868年2月22日付け）の中で、「追伸。君の散文的な論文は去年の内に受け取った。僕が読んだ結果として—君にひとつ忠告しておこう：詩を書くことだ、是非とも詩を」（Т(п), XI, 73. 傍点部原文イタリック）とだけ告げている。何とも含みのある言い方なので、作家の真意について確かなことは言えない。
- 48) *Там же*, стр. 734.
- 49) マーク・スローニム、池田健太郎訳、『ロシア文学史』、新潮社、1976年、215頁。なお、「ニヒリズムは、ロシア文学にあつては虚無主義ではなく、《否定主義》と呼ぶのがふさわしい」（同書、214頁）という訳者の指摘は、ピーサレフの場合ことのほか当て嵌まる。
- 50) 渡辺雅司、前掲書、153-155頁。
- 51) ただし、批評家はそれに続けて「だが我々は、詩人は詩人として、歴史家は歴史家として、それぞれが自分の専門において現実的な利益をもたらすことを必ず要求するのである」（П, III, 92. 傍点部分原文イタリック）と付け加えるのを忘れない。そのために彼はまず詩人に「政治的誠実さ」（политическая честность）を要求し、さらに、「真の、有益な詩人」は同時代の自国民の最も優れた教養人の関心を引くことはすべて知り、理解し、「真・善・美」と思われるものを全力で愛し、そのイデーの実現を妨げているものを激しく憎まねばならないとした上で、次のように宣告している。「ビョルネは言った、『私は他の作家たちのようにインクで書くのではない。私は心臓の血と神経の髄液によって書く』。あらゆる作家は、このように、ただこのようにのみ書かねばならない。そういうふうに書けない者は靴を縫うか、ピローグでも焼いているべきなのだ」（П, III, 94. 下線部引用者）。ここでピーサレフが十分紛らわしい言い方していることは認めなければならない。よくあるように、条件付きで言われた言葉は一人歩きを始めやすいものであり、また批評家の要求はかなり曖昧で、これでは事実上ほとんどの作家への廃業勧告であると読者が受け取ったとしても、責めることはできないであろう。
- 52) См. Иванов-Разумник *История русской общественной мысли* (4-ое издание). С.-Петербург, 1914, Том II, стр. 69, 85-91.
- 53) Гроссман Л. *Достоевский*. М., 《Молодая гвардия》, 1962, стр. 496.
- 54) Плеханов Г. В. *Литература и эстетика*. М., 1958, Том 2, стр. 208.  
ちなみに、ドストエフスキイはこの叫びに対して「プーシキンより上ではなかったが、下

でもなかった！」と応じ、さらに群衆が「上だ、上だ！」と繰り返すと、作家は今度はそれを無視して演説を続けたという (*Там же*)

- 55) *Там же*.
- 56) Ходасевич В. “Колеблемый треножник”, — В его кн. *Статьи о русской поэзии / On Russian poetry*. Letchworth · Herts · England, Prideaux Press, 1971 (first published in Russia, 1922), стр. 114.
- 57) Сорокин Ю. С. Комментарии к ст. “Пушкин и Белинский” Д. И. Писарева. — См. П, III, 548.
- 58) Mirsky D. S. *A history of Russian literature — from its beginnings to 1900* (ed. by F. J. Whitfield), New York, Random House, 1958, p. 227.
- 59) Moser Ch. A. *Antinihilism in the Russian novel of the 1860's*, London · The Hague · Paris, Mouton, 1964, p. 49.
- 60) Ходасевич В. *Указ. Соч.*, стр. 119.

※ 年譜の作成にあたっては、以下の文献を参考にした。

Богословский Н. В. *Тургенев* (3-е изд.). М., 《Молодая гвардия》, 1964.

Афанасьев В. В., Боголепов П. К. *Тропа к Тургеневу : Документально-художественная книга о жизни и творчестве И. С. Тургенева* (Научн. ред. П. Г. Пустовойт). М., 1983.

Коротков Ю. Н. *Писарев*. М., 《Молодая гвардия》, 1976.

Алексеев А. Д. *Летопись жизни и творчества И. А. Гончарова*. М. -Л., 1960.

Гроссман Л. *Достоевский*. М., 《Молодая гвардия》, 1962.

佐藤清郎, 『ツルゲーネフの生涯』, 筑摩書房, 1977年。

渡辺雅司, 『美学の破壊 —ピーサレフとニヒリズム—』, 白馬書房, 1980年。

外川継男, 『ゲルツェンとロシア社会 —ツルゲーネフおよびバクーニンとの論争に寄せて—』, 御茶の水書房, 1973年。

## ツルゲーネフ・ピーサレフ関係略年譜（露暦）

ツルゲーネフ	ピーサレフ	背景その他
1818年 10月28日 オリョールにて生まれる		1825年 アレクサンドル1世死去、ニコライ1世即位。デカブリストの乱。 プーシキン『エヴゲーニイ・オネーギン』（～32）
1834年 秋 モスクワ大学からペテルブルク大学に移る		1830年 フランス七月革命 1837年 プーシキン決闘に仆れる
1836年 6月 ペテルブルク大学卒業		
1838年 9月 ベルリン大学留学。グラノフスキイ、スタンケーヴィッチらと交わる	1840年 10月2日 オリョール県ズナメンスコエ村にて生まれる	1841年 レールモントフ決闘に仆れる 1842年 ゴーゴリ『死せる魂』
1842年 2月末 ベリンスキイと知り合う		
1847年 1月 『ホーリとカリーヌイチ』 （《同時代人》1月号）		
1848年 2月14日 ブリュッセルで二月革命の報に接し、急拠パリに戻る		1848年 フランス二月革命 ベリンスキイ死す
1850年 4月 『余計者の日記』 （《祖国雑誌》第4号）	1850年 夏 マリア・アレクサンドロヴナ・ヴィリンスカヤ（のちのマルコ・ヴォフチョーク）が休暇に学友たちとピーサレフ家を訪れる	1849年 ペトラシェフスキイ事件、ドストエフスキイ逮捕 1852年 ゴーゴリ死す 1853年 クリミア戦争勃発（～56） 1855年 ニコライ1世死去、アレクサンドル2世即位 チェルスイシェフスキイ『現実に対する芸術の美学的関係』 ゲルツェン《北極星》創刊
1852年 3月13日 ゴーゴリ追悼の『ペテルブルクからの手紙』発表（《モスクワ報知》）		
4月16日 同追悼文発表のかどで禁固一ヵ月		
5月18日 スバスコエへ追放		
8月7日 『獵人日記』出版		
1856 1月～2月 『ルージン』 （《同時代人》1月号・2月号）	1856年 9月 ペテルブルク都学歴史言語学部に入學	
10月 『ファウスト』 （《同時代人》10月号）	1858年 10月 《夜明け》誌の書評部門を担当することになる	1858年 チェルスイシェフスキイ『ランデヴーにおけるロシア人』
1858年 1月 『アーシャ』（《同時代人》1月号）	1859年 1月 《夜明け》誌創刊 『貴族の巢』論（《夜明け》第11号）	1859年 ゴンチャロフ『オブローモフ』第一部 ドブロリューボフ『オブローモフ気質とは何か』 ゲルツェン『Very dangerous!!!』
1859年 1月 『貴族の巢』（《同時代人》1月号）	12月 精神に異常を来し、ペテルブルクのシュテイン博士の精神病院に入院	
4月29日 マルコ・ヴォフチョークと国外旅行	1860年 4月 精神病院を脱走、両親のもとへ	オストロフスキイ『雷雨』 ドブロリューボフ『闇の王国』
1860年 1月10日 『ハムレットとドン・キホーテ』を講演	10月 詩人 Я. П. ポロフスキイを介して《ロシアの言葉》の編集長 Г. Е. ブラゴス	
2月 『その前夜』 （《ロシア報知》第1号・第2号）		

<p>この作品を論じたドブロリューボフの『今日という日はいつ来るか』を《同時代人》に掲載しないようネクラソフに申し入れるが拒絶され、同誌と決定的に断絶</p> <p>3月 『初恋』 (《読書文庫》3月号)</p> <p>◆3月20日 マルコ・ヴォフチョークあて書簡 (ピーサレフ青年は気が狂った)</p>	<p>ヴェートロフを知る</p> <p>1861年 12月 《ロシアの言葉》に寄稿を始める</p> <p>2月 ベテルブルク大学卒業。銀メダル授与 『19世紀のスコラ学』 (《ロシアの言葉》第5号・第9号)</p> <p>11月 ブラゴスヴェートロフとともにチェルヌイシェフスキイを訪れ、《同時代人》誌への招聘を辞退</p> <p>12月 《ロシアの言葉》誌の副編集長になる 『ピーセムスキイ、ツルゲーネフとゴンチャロフ』 (《ロシアの言葉》第11号)</p>	<p>1860年 ドブロリューボフ『今日という日はいつ来るか』、『闇の王国の一筋の光』 ゲルツェン『余計者と癩癪持ち』</p> <p>1861年 農奴解放令公布 ドブロリューボフ死す</p>
<p>1862年 ◆1月24日 Я. П. ポロンスキイあて書簡 (ピーサレフの『ピーセムスキイ、ツルゲーネフとゴンチャロフ』に触れ、「若者たちは唾を吐いている」)</p> <p>3月 『父と子』 (《ロシア報知》2月号)</p> <p>◆6月8日 П. В. アンネコンあて書簡 (ピーサレフの『バザーロフ』はすばらしい)</p>	<p>1862年 1月 『ピーセムスキイ、ツルゲーネフとゴンチャロフの中・長編小説における女性のタイプ』 (《ロシアの言葉》1861年第12号) 『バザーロフ』 (《ロシアの言葉》1862年第3号)</p> <p>7月2日 ゲルツェンを誹謗した秘密警察の密偵シェド・フェロッチを糾弾し、ロマノフ体制の打倒を叫ぶ檄文執筆のかどで逮捕される</p>	<p>1862年 アントノーヴィチ『現代のアスモデウス』 ベテルブルク大火の始まり。檄文『若きロシア』現わる 《ロシアの言葉》誌と《同時代人》誌は8ヶ月の停刊処分 チェルヌイシェフスキイ逮捕、要塞監獄収監</p>
<p>1863年 ◆10月1日 П. В. アンネコンあて書簡 (ピーサレフの『大学生活について』を送ってほしい)</p> <p>◆10月4日 アンネコンあて書簡で再度同じ要請</p>	<p>1863年 4月末 ベトロ・バヴロフスク要塞監獄にて母と最初の面会</p> <p>6月24日 要塞監獄内で文筆活動を続けることが許される 『我が大学の学問』 (《ロシアの言葉》第7号・第8号)</p>	<p>1863年 チェルヌイシェフスキイ『何をなすべきか』 ピーセムスキイ『荒れ騒ぐ海』 ポーランド蜂起(～64)</p>
<p>1864年 2月 『幻』 (《時代》第1号・第2号)</p>	<p>1864年 『罪なきユーモアの花』 (《ロシアの言葉》第3号) 『ロシア演劇のモチーフ』 (《ロシアの言葉》第4号) 『未解決の問題』(『リアリストたち』) (《ロシアの言葉》第9号・第10号・第11号)</p>	<p>1864年 ドストエフスキイ『地下室の手記』 レスコフ『どんづまり』(～65)</p>

ツルゲーネフ	ピーサレフ	背景その他
<p>1865年 ◆ 1月31日 アンネンコフあて書簡        (《ロシアの言葉》誌を私の名前で予約してくれ。『未解決の問題』を送れ。ピーサレフが私のために《同時代人》と闘っていると聞く)</p> <p>◆ 3月6日 アンネンコフあて書簡        (ピーサレフの「無駄口」は走り読みできるだろう)</p> <p>9月 作品集第3版(サラエフ版)        その第5巻に『もうたくさん』を初めて発表</p>	<p>1865年 『ロシア文芸の庭めぐり』        (《ロシアの言葉》第3号)        『プーシキンとベリンスキ』        (第4号・第6号)        『美学の破壊』 (第5号)        『見てみよう!』 (第9号)        『新しいタイプ』(『思考するプロレタリアート』)        (第10号)</p> <p>1866年 4月 面会と執筆活動を禁じられる        11月18日 要塞監獄から4年半ぶりに釈放される(この年から1869年にかけて、Ф. Ф. パヴレンコフがピーサレフの最初の著作集(10巻)を刊行する)</p>	<p>1865年 チェルヌイシェフスキ『現実に対する芸術の美学的関係』の第二版が出る        アントノーヴィチ『似非リアリストたち』</p> <p>トルストイ『戦争と平和』(～69)</p> <p>1866年 ドストエフスキ『罪と罰』        カラコーゾフによる皇帝暗殺未遂事件起こる        《ロシアの言葉》誌、《同時代人》誌ともに廃刊処分を受ける</p>
<p>1867年 2月(?) ピーサレフに会いたい旨漏らす        3月初 ピーサレフの二度の訪問を受ける</p> <p>◆ 3月30日 M. B. アヴデーエフあて書簡        (あの偉大なピーサレフが私に会いに来てくれた)</p> <p>4月半ば 『煙』 (《ロシア報知》第3号)</p> <p>◆ 4月24日 アンネンコフあて書簡        (ピーサレフは『煙』について何か言うだろうか)</p> <p>◆ 5月9日 アンネンコフあて書簡        (『旅団長』をどこに発表したものか。よかったらピーサレフに連絡してほしい)</p> <p>◆ 5月10日 ピーサレフあて書簡        (『煙』の感想を求める)</p> <p>◆ 5月23日 ピーサレフあて書簡(返書)</p>	<p>1867年 3月初 ペテルブルクのボトキン宅にツルゲーネフを二度訪ねる</p> <p>5月 ブラゴスヴェートロフと決定的に断絶</p> <p>◆ 5月18日 ツルゲーネフあて書簡(返書)        『生活の日常的側面』 (《事業》第5号)        (『罪と罰』を論じた『生活のための闘い』の前半)</p> <p>7月 マルコ・ヴォフチョークとともにネフスキ通りのロパーチンの家に移る</p>	<p>1867年 ポロンスキ『詩的な種の散文的な花』</p>
<p>1868年 2月22日 Я. П. ポロンスキあて書簡        (『散文的な花』は読んだ。君は詩を書いてたまえ)</p>	<p>1868年 『1789年のフランス農民』        (《祖国雑記》第6号)</p> <p>6月15日 ペテルブルク控訴院刑事局において</p>	

<p>1869年◇4月 『ベリンスキイの思い出』            (《ヨーロッパ報知》第4号)            11月 『文学的回想』</p> <p>1870年◇7月17日 のちの『処女地』着想のメモ            (「リアリズムのロマンチスト」が            いる。バザーロフの中にその要素が持ち            込まれていることに気づいたのはピー            サレフだけだった)</p> <p>1877年 1月 『処女地』第一部            (《ヨーロッパ報知》1月号)            2月 『処女地』第二部            (《ヨーロッパ報知》2月号)</p> <p>1878年◆1月21日 アンネンコフあて書簡            (若い頃愛好していた芸術をピーサ            レフの影響で放り出し、今では途方に            暮れている30男の話)</p> <p>1880年 6月7日 ロシア文学愛好者協会の集いで            プーシキンについて講演</p> <p>1883年 8月22日 パリ郊外ブジヴァールでヴィア            ルドー夫人に見取られて永眠(享年64            才)            9月27日 ペテルブルクのヴォルコヴォ墓            地のベリンスキイの墓の傍らに埋葬さ            る</p>	<p>『Д. И. Писарев 著作集』第二部に            関する文学訴訟</p> <p>6月21日 マルコ・ヴォフチョークととも            にリガへ出発</p> <p>7月4日 リガ湾で海水浴中に溺死(享年            27才)</p> <p>7月28日 ペテルブルクのヴォルコヴォ墓            地のベリンスキイの墓の向かいに埋葬            さる            『生存のための闘い』(《事業》第8号)            (『生活のための闘い』の後半、遺稿)</p>	<p>1868年 ドストエフスキイ『白痴』</p> <p>1869年 ゴンチャロフ『断崖』            ネチャーエフ事件起こる</p> <p>1870年 ゲルツェン、パリに死す</p> <p>1871年 ドストエフスキイ『悪霊』(～72)</p> <p>1874年 「人民の中へ」の運動最盛期</p> <p>1875年 トルストイ『アンナ・カレーニナ』            (～77)</p> <p>1877年 ネクラソフ死す            露土戦争(～78年)</p> <p>1879年 ドストエフスキイ『カラマーゾフの兄            弟』(～80)</p> <p>1881年 アレクサンドル2世暗殺さる。アレク            サンドル3世即位            ドストエフスキイ死す</p>
--	--	--

## Тургенев и Писарев

Наоки АЙДЗАВА

### содержание

#### Введение

1. Писарев в письмах Тургенева
2. Встреча у Боткина
3. Переписка по поводу романа “Дым”
4. Размышления об отрицании
5. “Романтик реализма” (1)
6. “Романтик реализма” (2)
7. “Миф” о Писареве

Хотя отношения между И. С. Тургеневым и литературным критиком Д. И. Писаревым неоднократно привлекали к себе внимание исследователей, в большинстве случаев изучалось исключительно отношение Писарева к Тургеневу, т. е. были проанализованы статьи критика о писателе, или исследовалась та роль, которую играло тургеневское творчество в идейном развитии критика, и т. д. Насколько нам известно, одна исследовательница Е. М. Ефимова поставила вопрос о том, “как Тургенев относился к Писареву”, когда она написала статью “Тургенев и Писарев”(1968г.). Но её главный предмет изучения — отношение писателя к критику в плане общественной мысли, и к тому же, преимущественно при жизни Писарева. На самом деле интерес Тургенева к Писареву несколько не ослабел даже после ранней смерти критика и писатель касался его прямо и косвенно, и в личной переписке, и публично в воспоминаниях, и скрытым намёком в своём романе. Необходимо дополнить прежние исследования.

В настоящей статье мы рассматриваем отношение Тургенева к Писареву не только при жизни, но и после смерти критика и пытаемся освещать восприятие художником Писарева в общей истории литературной рецепции этого критика в России.

#### 1

В первой главе приводятся прямые отзывы Тургенева о Писареве, высказанные в частной переписке с друзьями в период с 1860 по 1865 год и рассматривается

интерес писателя к молодому критику.

Судя по письмам, сначала писатель не обращал никакого внимания на Писарева, когда тот был критиком журнала "Рассвет" (1858-1859 г.). Потом когда он стал сотрудником журнала "Русское слово" и написал статью "Писемский, Тургенев и Гончаров" (1862 г.), Тургенев в одном письме Я. П. Полонскому выразил своё негодование по поводу этой статьи: "Молодые люди плюются". Однако выход статьи Писарева "Базаров" в самый разгар спора о новейшем тургеневском романе "Отцы и дети" возбудил в художнике особый интерес. Тургенев писал П. В. Анненкову (1862 г.): "Статья Писарева в "Русском слове" мне показалась очень замечательная". После этого он внимательно следил за критической деятельностью Писарева, высоко оценивая его проницательность. В период с 1863 по 1865 год в письмах Анненкову Тургенев неоднократно просил его прислать в Баден-Баден статьи Писарева "Наша университетская наука" и "Реалисты" ("Нерешенный вопрос").

## 2

Во второй и третьей главах рассматриваются встреча Тургенева с Писаревым и последовавшая за ней короткая переписка по поводу романа "Дым".

В марте 1867 года в Петербурге на квартире В. П. Боткина два раза встречался Тургенев с Писаревым, только что освобождённым из Петропавловской крепости после четырёхлетнего заключения. Тургенева удивили благородная внешность и аристократические манеры "нигилиста" Писарева. Об этом явно свидетельствуют его письмо М. В. Авдееву и воспоминания Н. А. Островской. Между тем в своих "Воспоминаниях о Белинском", цитируя свой разговор с Писаревым по поводу его статьи о Пушкине, Тургенев критикует нападки Писарева на лирических поэтов как анахронизм, противопоставляя его Белинскому, который, по мнению писателя, понимал то, "что именно стоит на очереди, что требует немедленного разрешения, в чём сказывается "злоба дня".

## 3

В апреле того же года Тургенев опубликовал свой пятый роман "Дым" и с нетерпением ожидал в Баден-Бадене отзыва Писарева о своём романе. Видимо, писатель надеялся, что суждения Писарева будут проницательнее других критиков и на этот раз. Наконец в следующем месяце он написал ему письмо с просьбой высказаться о новом романе: "Какое впечатление произвел "Дым" на Вас и Ваш кружок?" Писарев прямо ответил, что роман "решительно не удовлетворяет" его и представляется ему "странным комментарием к "Отцам и детям", а потом в свою очередь засыпал Тургенева вопросами: "Иван Сергеевич, куда вы девали Базарова?", "Неужели же вы думаете, что первый и последний Базаров действительно умер в 1859 году от пореза пальца?", "А если вы его заметили и умышленно

устранили его при подведении итогов, то, разумеется, вы сами, de propos délibéré, отняли у этих итогов всякое серьёзное значение” и т. д. Сравнивая Литвинова, героя нового романа, с “муравьиной кочкой”, а Базарова с “каланчой”, Писарев резко упрекал Тургенева в том, что он смотрит на явления русской жизни с высоты “низкой и рыхлой муравьиной кочки”, и больше не судит о них с вершины “настоящей каланчи”.

Тургенев немедленно ответил Писареву, возражая ему убеждённым тоном: “Вы не сообразили того, что если Базаров и жив — в чём я не сомневаюсь, — то в литературном произведении упоминать о нём нельзя: отнести к нему с критической точки — не следует, с другой — неудобно. <.....> “Каланча” эта стало быть не годится”. Семь лет спустя в письме А. П. Филосовой Тургенев снова говорит: “Времена переменялись; теперь Базаровы *не нужны*”. Далее он утверждает, что русской народной жизни “нужны помощники — не вожаки”. Таким образом можно сказать, что кратковременная переписка писателя с критиком ярко характеризует расхождение в их взглядах по вопросу “положительного героя”. Только через год после этой переписки Писарев утонул в Риге, не оставив статьи о “Дыме”.

#### 4

В этой главе трактуется вопрос о понимании “отрицания”, которое играет значительную роль в отношении Тургенева к молодому критику.

Как писатель, создавший “нигилиста” Базарова, Тургенев глубоко размышлял об “идее отрицания” ещё со времён молодости, когда он находился под сильным влиянием гегельянской диалектической философии. Характерно, что в ранней статье о “Фаусте” (1845 г.) он высказал свою “философию об отрицании”: “Всякое, даже положительное, начало должно, при первом появлении своём, носить характер отрицательный (иначе оно себе никогда не завоюет места)”. В дальнейшем его размышления об отрицании углубляются в тесной связи со зрелостью его взглядов на человеческую жизнь. В известной речи о “Гамлете и Дон-кихоте” (1860 г.) оратор говорит:

Но в отрицании, как в огне, есть истребляющая сила — и как удержать эту силу в границах, как указать ей, где ей именно остановиться, когда то, что она должна истребить, и то, что ей следует пощадить часто слито и связано неразрывно? Вот где является нам столь часто замеченная трагическая сторона человеческой жизни: для дела нужна воля, для дела нужна мысль; но мысль и воля разъединились и с каждым днём разъединяются более.....

Совершенно естественно, что такой мыслитель об отрицании чувствует неотразимый интерес к “отрицателю” Писареву, который говорит: “Что можно разбить,

то и нужно разбить”, “Кто в России сходил с дороги чистого отрицания, тот падал”. Но в таком случае, не видит ли Тургенев, который так хорошо знает “трагедию отрицателя”, “разъединение мысли с волей” в “нигилисте” Писареве? Далее, в пятой и шестой главах, мы рассматриваем этот вопрос.

## 5

Н. А. Островская приводит в своих воспоминаниях слова писателя во время разговора об “Отцах и детях”: “Разбор Писарева необыкновенно умён. Я должен сознаться, что он почти вполне понял, что я хотел сказать Базаровым”. Тогда что, по Тургеневу, понял Писарев? Ключом к решению этого вопроса может служить заметка писателя о замысле своего последнего романа “Новь”. Он пишет:

〈……〉 есть романтики реализма 〈……〉 Они тоскуют о реальном и стремятся к нему, как прежние романтики к идеалу. Они ищут в реальном не поэзии — эта им смешна, но нечто великое и значительное, — а это вздор: настоящая жизнь прозаична и должна быть такою. Они несчастные, исковерканные 〈……〉 Между тем их явление, возможное в одной России 〈……〉, полезно и необходимо: они своего рода пророки, проповедники 〈……〉 Пророчество — болезнь, голод, жажда: здоровый человек не может быть пророком и даже проповедником. Оттого я и в Базарове внес частицу *этого* романтизма, что заметил один Писарев.

Писарев в статье “Реалисты” (“Нерешенный вопрос”) говорит: “Базаров с первой минуты своего появления приковал к себе все мои симпатии. 〈……〉 Ни один из подобных ему героев не находится в таком трагическом положении, в каком мы видим Базарова”. Можно судить, что такое понимание “трагизма базаровского положения” позволяет критику заметить частицу “романтика реализма” в Базарове. А. И. Герцен чутко отмечает, что Писарев “в Базарове узнал себя и своих и добавил, чего не доставало в книге”.

## 6

Известно, что для создания образов в романах Тургеневу всегда необходимы реальные лица. Что касается его последнего романа “Новь”, то можно отметить, что в образе главного героя Нежданова отразились некоторые черты Писарева, в частности, во-первых, сочетание в нём “нигилизма” с благовоспитанностью и аристократическими манерами, а во-вторых, его постоянные нападки на “эстетику”. Ещё более подробные сведения даёт нам “формальный список лиц”, приготовленный самим автором. “Романтик реализма” Нежданов и “нигилист” Писарев похожи не только по характеру: “ужасно нервен, впечатлителен, самолюбив”, “нежен и изящен”,

“горько чувствует своё одиночество” и т. п., но и по биографии: Нежданов родился в 1843 г., а Писарев — в 1840 г. Оба погибли в 1868 г. (Значительно, что Нежданов покончил с собой, тогда как говорили о самоубийстве Писарева) — именно “Натура трагическая — и трагическая судьба”. Сверх того, романист открыто упоминал имя критика, называя главного героя “покронником Добролюбова. (Взять несколько от Писарева.)”.

Герцен был прав, когда он отметил, что “Писарев знает сердце своего Базарова дотла, он исповедуется за него”, цитируя отрывок статьи Писарева: “Может быть, Базаров в глубине души признает многое из того, что отрицает на словах”. Тогда не признает ли сам Писарев “в глубине души многое из того, что отрицает на словах”? Возможно, что Тургенев подозревал об этом, когда он встречался с Писаревым и говорил ему откровенно по поводу его нападок на одно из стихотворений Пушкина: “Эстетическое чувство в вас слишком живо: Вы не могли сказать это серьёзно — вы это сказали *нарочно*, с целью”.

Я. П. Полонский, пытаясь указать на противоречия рассуждений Писарева, называл его “прозаическим расцветом поэтических семян”. Это странное выражение напоминает нам о тургеневском “романтике реализма”. Из всего этого следует предположение, что Тургенев относил Писарева к числу “романтиков реализма”.

## 7

В последней главе мы освещаем вопросы об идейном влиянии радикального критика на потомство и о передаваемом из поколения в поколение образе Писарева как “отрицателя искусства” или “разрушителя эстетики”. В работе приводятся два характерных эпизода.

В одном письме П. В. Анненкову из Парижа в 1878 году Тургенев рассказывает об одном 30-летнем русском, который признался ему, что “в молодости любил поэзию и Пушкина, играл на скрипке и рисовал — и бросил всё это под влиянием Писарева (и не один он это сделал) — а теперь, окургузившись кругом, не знает, к чему приткнуться, и только охает”.

Другое символическое событие произошло в конце 1877 года на похоронах Н. А. Некрасова в середине речи Ф. М. Достоевского. Едва только он сказал, что по своему таланту Некрасов был не ниже Пушкина, как Достоевского прервал голос из толпы: “Некрасов был выше Пушкина и Лермонтова, те были только байронисты……”. В одной статье в 1917 году Г. В. Плеханов признает, что это возражение принадлежало ему и окружавшей его группе революционеров, которым сравнение Некрасова с Пушкиным показалось “вопиющей несправедливостью”. Каясь в своём грехе, Плеханов приписывает это болезни века: “Но таково было наше тогдашнее настроение. Все мы в большей или меньшей степени разделяли взгляд Писарева, который “разнес” нашего великого поэта в известной статье “Пушкин и Белинский”.

В. Ходасевич в речи на Пушкинском вечере в 1921 году, назвав такого рода явления в прошлом веке “первым затмением пушкинского солнца”, справедливо отмечает :

В истории русской литературы уже был момент, когда Писарев “упразднил” Пушкина, объявив его лишним и ничтожным. <.....> С тех пор имя Писарева не раз произносилось с раздражением, даже со злобой <.....> Писаревское отношение к Пушкину было неумно и бесвкусно. Однако-ж, оно подсказывалось идеями, которые тогда носились в воздухе, до некоторой степени выражало дух времени, и высказывая его, Писарев выражал взгляд известной части русского общества.

Нельзя упускать из виду, что отрицательное отношение к Пушкину проявил Писарев, только узнав тургеневского Базарова. Следовательно, в известном смысле можно сказать, что Тургенев, как создатель “нигилиста”, несет немалую долю ответственности за образ “Писарева-отрицателя” в истории русской литературы.